國民之友第貳百參拾六號

（明治廿七年九月廿三日發兌）

國民之友

憂、外にあらずして内にあり

吾人が此文を草せんと欲して筆を下すときは、我軍已に成川、中和、大同江未より各〻清軍を擊つて、平壤に迫り、一宵の大戰に悉く其の精銳を捕斬し、清軍、滿州に向て禽奔獸散せる時にして、國民と軍隊と、意氣直ちに北京を呑まんとするに、一個の暗礁は隱約の間に我を待つ。何ぞや獨、英、露三國公使の芝罘會議也。

芝罘會議は近世の歷史に比類なき顯象を呈せり。露國は多年清國と相爭ふて、其寸土尺地を擴げんと欲するの外なく、日本に對しては寧ろ好意を表するに足らば、千萬の犧牲も、避けざらんとせる者也。獨逸は東洋に於て、特殊の利害を有せずと雖も、露佛の二國同盟に對する三國同盟の盟主にして、固より露國と事を東洋に共にすべき緣因を有せざる也。今や此三國の公使、芝罘に相會して交涉を試むるに至ては、何等の奇事ぞ。是れ實に歐洲近世の歷史に類例なき事と云はざるべからず。

交涉已に奇也。其の交涉によつて爲さんと欲する所を見れば、更らに驚奇の念を重ねざるを得ず。曰く平壤の戰決し、清兵鴨綠江を渡つて遼東に退くの日三國共同して、日清兩國を勸誘して爭鬪を已めしむべしと。是れ恐らくは虛報なるべし。何となれば吾人は之を訝るの餘、寧ろ失笑を禁ずる能はざるほどに無道理なればなり也。

三國公使は日本國民を以て支那を征服するの決心なくして、朝鮮を經營するものとなす乎。世界の勢力を排するも、また辭せざるの決心なくして、支那征伐を試むるものと爲す乎。是れ已に笑ふべき也。三國公使は三國の利害相異なれるに係らず、何處までも共同して、其の手强き勸誘を維持し得べしと信ずる乎。スペクテートルが『我等が取るべき安全の得策は唯だ埒を結び

回して戰闘者をして戰ひ丁らしむるにあり』と云ひしが如く、三國の力によりて兩國の周圍に範圍を結び回すを以て、實際爲し得べきものと思ふ乎。此の範圍は吾人を圍みて、吾人の逸出を防ぐに足る程手强よきものと思ふ乎。是れ重ねて笑ふべき也。芝罘會議の道理なき、此の如し。然らば即ち何を以て我前途に於ける暗礁と爲す乎。曰く憂外にあらずして實に內にあれば也。

我國民の熱情は彼等を熔解して、一團の鐵火の如くならしめぬ。國民的精神の迸しる所、何人も之に熱化せられざるはなく、一人立つて姑息の平和を唱ふる者あるなし。然れども四千萬人の中、一人の平和論者なしと云ふは非也。初より幾多の平和論者あり。殊に所謂る日新の事物に通曉せると云ふ政治家の中に多かりし也。唯だそれ國民公憤の激する所、軍人の銳氣の勃發する所、邀へ近くべからずして且らく其口を箝したるのみ。彼等は剛語を以て軟膓を粧ひつゝ先づ天津條約を楯として爭はんとせり。此時に方つて淸國にして私に此間に於て淸國と爭はずして、事局を結ぶを得んことを希ふたる政治家もありし也。然れども事局は益〻廣がりて容易に收むべからず。彼等は他の大勝によりて、國民の誇心を滿足せしむるの日を待つの外なし。彼等に取りては殊に幸なる哉。平壤の一戰、淸兵を擊つて長驅席卷、鴨綠江の彼方へと追ひ遣らば是れ豈に最も平和論の氣燄を鼓するの幸機ならず耶。況んや內には成歡の役後、一日三十萬金を費すの軍隊、外にあること已に四十五日、不景氣の聲は傳染病の如くに感染しつゝあるをや。況や、外には露獨英三國の公使が平和の勸誘を試みんと待ち構へつゝあるをや。平和論若し蘇生せばそれ必ず平壤の役後にあらん。是れ吾人が前途に暗礁ありと爲す所以也。

夫れ山中の賊を去るは易く、心中の賊を去るは難し、列國の抗拒を退くるは易く、國中の平和論を排するは難し。若し列國が會議の名によりて我を招くに方り、我自ら之に加入し、而して會議の決定によりて、却つて我が如きことあらば、是れ千日の積苅を一火に附するもの也。吾人は豫じめ國內の平和論を排し、以て此の會議を辭するのみならず、併せて此會議をして其の效を失せしむるの決心なかるべからず。

人或は芝罘會議を以て、露土戰爭に關する伯林會議に比するものありと雖も、然らず。伯林會議は英國が露國の南下に對する正當防禦に出で、歐洲の權力平均を維持せんとするもの也。今や日本、清國を征服するも、決して西比利亞に入つて、南西、印度に出でんとするものにあらず。之が爲め歐洲の權力平均を覆へすものにあらず、また東洋の權力平均を覆へすものにあらず、寧ろ尨大、治め易からざる清國を征して、新たに東洋の新權力平均を作らんと欲するものなり。東洋に於ては何の因緣もなき風來客、獨逸は更らも也、露英と雖も、權力平均の點より我を控制すべき理由を有せざる也。殊とに伯林會議の如きは、英國は全力を盡くして露國と爭ふたり。芝罘會議に於ては、英國は此決心ある能はず。殊に將來の大敵たる露國と相結托して、極力的の抗爭を試みんとするが如きは、機敏なる英國政治家をして試みしめんには餘りに痴愚なる仕方也。且つそれ伯林會議は露國已に土耳古を打擊して、其の戰鬪力を失せしめたる後、露國の勢力、南歐の一半を掩有せんことを恐るゝに出づ、天下之を識認したるものは、實に勢の已むを得ざるに出でしが故也。今まそれ日本未だ清國を掃蕩せずして、伯林會議を繰り返さんとす。吾人は其名に於ても、何等の効果あるを信ずる能はず。吾人にして此會議に出席せずんば此會議は事實に於て成立せざるもの也。吾人は何を苦しんで此會議に加入すべけんや。

萬一、此會議により吾人の征伐を中止するが如きことあらば、之により利する所は、列國をして依信を清國に得せしむる也。清國をして必敗の師を還さしむる也。日本の爲めに占領せらるべき土地を依然として有する也。利益は凡べて列國に分れ、日本は幾百の生命と幾千萬の財を費して而して政治上の飽喜翁（ドンキハウテ）たる空名を得るに止まらんとす。己の妻子を捨てゝ從軍せる壯丁は、無一物の爲めに生命を捨てし也。餓へんとせる己の父母を捨てゝ義戰に加はりたる少年は、徒らに死せし也。萬斛の淚を以て、己の子を送りたる老爺老婆は、徒らに淚を洗ぎし也、四千萬人の公憤は、得る所なくして終りし也。是れ或は忍ぶべし、清國にして城下の盟を爲さゞる、戰鬪力の失せざる、再び我と爭ふ十年を出でざらんとす。昔は英佛同盟軍のクリミヤを擊つて、巴里の平和條約となるや。アバデーン伯之を評して廿五年の平和を保つに過ぎざるべしと云ふ。

不幸にして二十五年を保たず、二十二年にしてまたベルリン會議となる。吾人は十年と云ふ。然れども何ぞ十年に達せずして、再び清國を擊つの、已むべからざるに至らざるを保せん耶。此時に方つて明治二十七年の平和會議を回顧して、悔ゆるもまた晩からず耶。苟も我國民にして十年の後を圖り、百年の計を案じ、斷乎たる決心を以て勇進せば、列國會議將た何ものぞ。列國の中一國をして、常に主動者たらしむるこそ、我却つて迫られ、我自ら進みて列國の間に周旋せば、我は却つて位地の主人たらん。英佛同盟軍の北京を攻むるや露國は其間に周旋して、黒龍江畔の地七百里を得たるを以て、歐洲の外交家は之を歎稱す。其膽何ぞ大ならざるや。我政治家何ぞ、日清の戰に際して、露國をして之よりも絶大なる獲物を取らしむるの默契を爲さゝる耶。佛國は國力を盡くして僅かに鴉烟瘴雨の安南を經營し、併かも歐洲の權力平均に制せられて、之より大なる能はざるを嘆ずるにあらず耶。我政治家何ぞ、佛國をして安南より、大なるものを取らしむるを爲さゝる耶。若しそれ英國にしてまた我に異存なきを乎。また何ぞ香港より大なるものを取らしむるを爲さゝる耶。列國の爭ふ所は、利益に外ならず。苟も我にして世界の舞台に上りて、飛舞するの大膽あらん乎。列國は決して我妨にあらず、列國をして我妨害たらしむると、援助たらしむると、唯一我が決心の强弱に關す。吾人が憂外にあらずして、內にありと云ふもの之が爲めのみ。

ビスレーリ伯林會議に赴かんとして、先づ英國に演說して曰く、『義に赴くに方つてや、英國は第二第三の大戰を繼續するの力あるや否やと思慮して、躊躇する國民にあらず。義に赴くに方つてや、英國は最後まで戰ふの戰をも辭せず』と。之を聞くの露帝はまたモスコウの市民を鼓舞して曰く、『列國會議にして我要求を聽かずんば、露國は獨り事を爲さん。凡べての露西亞を集るも、また辭せず』と。我國民は其首領と、其政治家の鼓舞を俟たずして、自ら此の意氣を有する國民を背後に負ふ政治家は、如何に幸ぞ。然れども此の民を用ゐる能はずんば如何に禍なるべきぞ。

愛國心高潮の時機

今や愛國心高潮の時機に到着しぬ。美なる江山は更に美に、美なる森林は更に美に、曾て人間のその間に住

するによりて、濱され、傷はれたる自然は、今や人間のその間に住するによりて、一層高くせられ、一層美うせられぬ、看よ、芙蓉峯は、國民の愛國心に飾られて、更に一層秀美の光を放つにあらずや。一人の生涯は、一國の生涯の縮圖なり。同く一人の生涯なり、或る時は善、或る時は惡。同く一國の生涯なり、或る時は、清明、或る時は汚濁。而して之を概するに、人の生涯に於ては、善なるの日少きが如く、國の生涯に於ても、清明の日少なし。故に國其清明なるを致すの時は、最も珍重す可く、最も尊敬す可し。而して、我國は、今や清明なり。

人の目的は、神佛なり。國の目的は、ユトピヤなり。人が恒久に神佛となるの日は遠かる可し。然れども、人は、或る瞬間に於ては、神佛なり。國が、恒久にユトピヤに近けり。

四千萬の國民が總て愛國心に滿たされ、公共心に滿たされ、利慾も、名聞も、最も棄て難き個人的愛情すらも、更に棄て難き身命すらも、國家の爲めに犧牲とするを敢てするの一大事實は、今の世界何れの處にか其比を求むべき。三千歲の歷史何れの處にか其類を見る可き。嗚呼是れ實に十九世紀の一大現象なり。而して是れ實に所謂ユトピヤなるものに近しと謂はざるを得ざるなり。

大日本國民は、今や大日本國民の心を有す。何人の頭腦にも大日本國存在す。何某の家、何某の身、何某の財は則ち其中に在らず。國民は總て國の名譽を求む、個人の名譽は則ち棄てゝ顧みず。國民は總て國の勝利を求む、個人的競爭は、則ち放棄して顧みず。國民は總て國の富實を求む。個人の財は則ち空しと雖顧みず。一の日本人民は、則ち一の日本國なり。四千萬の人民は則ち四千萬の日本國なり。彼れ清國の民只李某、袁某、葉某といふが如く、個人的思想ありて、國民的精神なし、國家的觀念なし。即ち形躰上に於ては、一大國なりと雖、精神上に於ては、個人ありて、國民なし、國家なし。四千萬の大日本國を以て、國の精神なき一清に當る。勝敗の數自ら炳然たり。

內亂は、多く國民の品位を墮落せしめ、外難は多く一國民の品位を崇高ならしむ。內亂は多く私心を含み、外難に際しては、一國民全く公心に充たさる。日清事件は、實に我國の品位、我國民の品格に向て、一大飛

曜を與へたりき。日清事件以來我國の品位、我國民の品格は、世界第一等の地に立てり、吾人は實に之を榮とせざるを得ず。○大日本の狀態にして、今の如くして、進んで止まずんば、準たり、大日本國は、大日本國民は人として、人類の標の上には必らず永久の光榮あらん。

然れとも、今日は、只夫れ愛國心高潮の時機のみ。吾人は實にその退潮の日來らんとを憂ふ。愛國心の高潮は果して幾時日を永續す可き乎。果して永久高潮たる可き乎、或は瞬時の後忽ちにして、退潮の期來る可き乎。

人心の變實に測り易からざるものあり。吾人は恐る愛國心の高潮は或は長くして、日清事件と相終始するにはあらざる乎。或は又た日清事件の永續する間に於て忽ち退潮に變ずるにはあらざる乎と。吾人は愛國心の高潮をして、恒久たらしめんと欲す。吾人は、日清事件と相關係して滿退する潮の月に於けるか如く岸を流すの滿潮忽ちに一落して、泥砂茫々たるを好まざるなり。故に愛國心を刺激したる所ろの日清事件は、終結するも、愛國心は永久に高潮となり、國家は常に清明國民は常に崇高ならんとを切望するなり。

若し夫れ日清事件の永續に倦み、此の如く滿ち溢れたる愛國心をして俄に乾落せしむるが如きとあらば、是れ國家の大頽倒なり、國民の大墮落なり。是れ利慾愛國心を覆したるなり。私心公共心に打勝たるなり。天使の翼の如く天空に舞ひたる國民の品位は、墨よりも暗き陰黑の谷に墜落したるなり。その日清戰爭に及ぼす所の結果は實に恐れて懼る可きなり。幸に清國に對して、我國の面目を保つを得るも、大日本國の品位は下り、大日本國の歷史は瀆され、大日本國は、世界に於て、最も小きもの、最も醜きものとならん。是に於て、我四千萬國民は何の顏ありて、我美なる江山を見んとする乎。

死生の際

人生は夢なる乎。見ゆる世界は忽にして過ぎ去るべき乎。功名、富貴、戀愛、戰鬪は渾て浮雲の如き乎。青塚は人の最後にして、死は萬事の終りなる乎。吾人の斯の如く問ふを以て僧侶の閑話なりとする勿れ。何となれば是れ吾人が本心より發する切實なる問題なれば也。國民の品性と事業とに關する問題なれば也。

富貴若し能くすべくんば之れを得ん、若し能くすべからずんば豆を野に種へ、其熟するを待ちて之れを食はん、村肴野酒、靜かに天年を終ふるに足れり。進むに急にして退くも亦急也。死を輕んず固より生を重んぜざれば也。歌ふと悲愴なり、人生終に露の零つるが如く落つべければ也。屈辱忍ぶべし、虐ぐる者も虐げらるゝ者も終に共に墓中に眠るべければ也。人權何ぞ尊ぶに足らん、人は是れ塵芥の如くなれば也。人若し我の中に永遠の生命あり、不朽の德あるを知らずんば其心を設くる寧ろ斯の如くならざらんや。人は恒に遽かしき者に非ず、世界は時として人を自覺に招くべき爲めに寂寞と間暇とを與ふ、中夜人定りて靜かなる時、若くば深林一鳥閑なる處、思を永遠に馳せて我生如何と顧みれば、前程は即ち斷崖千丈、忽ち我を擠するの暗黒あるに非ずや。謂ふと勿れ何ぞ死を恐れんと、死を恐るゝは固より男兒らしきとに非ず。而も死を解せずして止むは更に多く男兒らしきとに非ず。死若し知るべからざるの秘密ならば、人生も亦雲煙のみ。死若し暗黒ならば、人生も亦暗黒なるのみ。死生の際、焉ぞ深く思を致さゞるべけんや。

林々總々たる途上の人を以て彼れ死あるを知らず、知るも顧みず、唯目前の事に勞して旦勉むる者なりとするも勿れ。死は哲學者をして思はしむるが如く亦常人をして思はしむ、彼等は各〻己れの宗教を要す、未だ嘗て一人だも死生の外に超然たる能はざる也、獨り哀しむ彼等の死を解する必至の運命として解するのみ、人生の最終として解するのみ、解すべからざる暗黒として解するのみ、此を以て其歌謠に出づる者は厭世の情なり、其日々に語る所は人生無常也。斯の如くにして、焉ぞ堅忍、耐久、進んで已まざるの民たるを望まんや、

頃ろ本願寺法主の朝鮮派遣の兵士を諭すものを見る、曰く、

本年は內國に在ても視融の威殊に烈しく日夜汗滴珠を流し炎暑の苦堪へがたし夫に就ても海外出陣の陸海軍人諸子が山河を跋渉し風濤を凌衝して國家の爲めに奔走せらるゝ勞苦の程も想ひやられて眞妙に存ずるなり且過日來成歡の役と云ひ豐島の戰ひと云ひ海陸ともに開戰第一着天晴れの勝利を獲て帝國の武勇を輝やかされし功勞は謝しても猶ほ餘りありされば予も此際一たび渡韓して親く諸子を慰問し法義の上より出陣の心得をも申し聞せ度存ずれ共內國に在ても事務多端の折柄なれば未だ其運ひにも到り難し依て不本意ながら書取を以て其筋へ申し送るとゝせり能々聞取らるべく候

抑〻今回日淸の戰爭は吾帝國未曾有の事變にして國家の安危　皇威の消長も此一戰の勝敗如何により分かるゝ儀に候へば苟も皇國の臣民として祖先以來二千有餘年間世々　皇室の恩澤を蒙りたる者はいかで此の際に當て報國の誠を致さずして可ならんや殊に陸海軍人諸子は其

職分直接に攻守の任に當り國家の柱石となるべき者なれは愈〻以て平生養ひたる武勇を振つて身命を惜まず專心に奉公せざるべからざる儀に候

さりながら未來後生の一事に就てうつくしく決定する所なければ砲煙彈雨の間に立て動もすれば疑懼躊躇して不圖平生の所懷に負くるをなきを保し難しされば後生の出離を決定し置くこと現に戰場に向はれし陸海軍諸子の身上に於ては最も肝要の儀に候なり偖て後世出離の要は吾宗の教義に於ては平生示し置きしが如く阿彌陀如來が曾て吾等凡夫の爲めに勇猛精進にもろ〳〵の善行を修して超世の願力を成就し玉ひしに由て吾等衆生は毫末も自身に修行することを要せず彼の願力を信ずる一念に萬善萬行其身に圓滿して往生淨土の業事成辨する儀に候かゝる殊勝のいはれなれば深く願力を信じて未來の出離に就て一念疑懼の心を挾まず命終れは即時に淨土の妙果を證することゝ喜ひつゝ　陛下の曾て軍人へ下し玉へし詔勅趣意を眛認して忠孝節義を重んじ　陛下の宸襟を安じ奉り下四千萬同胞國民の望に答へられるべく候猶追々秋冷の候に向へば衛生にも注意して異鄕瘴癘の氣に犯されぬ樣能々自愛せらるべく祈る所に候也

故あるかな、一向門徒の威を戰國に揮ひしや。彼等の死は光明に達するの門なり。淨土に入るの路なり。萬事の終に非ずして永遠の始めなり。暗黒に入るに非ずして榮光に曜る也。是れ其百敗して屈せず信長秀吉の英雄をして猶之れを剪除するに困しましめたる所以也。今や法主此教を以て其徒を諭す。其徒眞に之れを信せば、吾人は其兵氣百倍するを疑はざる也。吾人は唯だ今の不信なる世に生れたる青年の兵士が之れを一笑に付せんとを恐るゝのみ。

唐書の回々教徒を記すや曰く。王高坐（ヨリ）テ下（クダ）ル拜ス。死レ敵者生ニ天上一（コニ）。殺レ敵（セバ）授レ福（クヲ）。故俗勇ニ于鬪一（ニト）。と堅信扱くべからざるモハメットが、樂園は劍の下に在りと教へたる死の榮光を希望するサラセン人の武威は獨り西歐を震はしめたるのみならず、倨傲なる東方の支那に鳴りし也。

夫れ死生の際に於て恐るゝ所なし、復何物を恐れ何事をか憚らん。是れを宗教善く人を不朽ならしむると曰ふ也。是れを宗教善く人をして起たしむると曰ふ也。

理の明かなる之れを望みと曰ふ、望みの明かなる之れを信と曰ふ。パウロ曰く、

夫れ信は望む所を疑はず、未だ見ざる所を眞とするなり。

既に信の永遠を照すあり。徹上、徹下、照透殘す所なし。盡く光明也、盡く樂土也、盡く實在なり。死生は光明の中に一歩を轉ずるに過ぎざるのみ。此の如くにして人は始めて人の尊きを知るべき也。人生は始めて有爲の境となる也。

誰れか死生を論ぜずして可なりと謂ふや、吾人は信ぜず。

特別寄書

軍事財政策

小野英二郎

抑ゝ今回ノ日清戰爭ハ何時迄經續スヘキヤ、又タ之ニ對スル軍費ハ何程ノ金額ナルヘキヤ、余輩素ヨリ之ヲ知ルニ由ナシ、然レトモ日清ノ衝突ハ其ノ來ルヤ久シク、朝鮮事件ノ如キハ之レカ破裂ヲ促ス機會ヲ與ヘタルニ過ギザルナリ、清國老朽能クナス所ナシト雖モ、其ノ海軍ヲ沈メ、陸兵ヲ盡ニシ、海陸相應呼シテ北京ヲ衝キ、敗嚢ノ餘又タ立ツ能ハサルノ衰運ニ達セシムルニハ決シテ一擧手一投足ノ勞ニ非サルヤ明カナリ、況ンヤ我國ハ朝鮮ノ獨立ヲ永遠ニ擁護シ、其ノ文明ヲ啓發スヘキノ義務ヲ有スルニ於テヲヤ、又タ況ンヤ日清事件ハ延イテ東洋全局ノ破裂ヲ將來ニ生スルノ恐レアルニ於テヲヤ、我國カ現在及ヒ將來ニ於テ多額ノ軍費、國防費ヲ要スルコトハ、今日ニ於テ我カ財政家ノ充分ニ覺悟セサルヘカラサルノ要件ナリ、

此ノ多額ノ軍費、國防費ハ如何ナル財源ヨリ支出センノ塲合ニ於テ一億萬圓以上ノ軍費ヲ供給スルハ決シテ難キニ非サルナリ、若シ左ニ揭クル方法ノ二三ヲ併用セハ數千萬圓ノ軍費ハ忽チ之レヲ募集スルコトヲ得ヘシ、

一、大ニ義捐金ヲ募集スルコト、
二、國民ノ愛國心ニ訴ヘ低利若シクハ無利息ノ內國債ヲ募集スルコト、
三、剩餘金其他ノ國庫金ヲ流用スルコト、
四、官設鐵道其他ノ官有物ヲ拂下ルコト、
五、一時日本銀行ニ紙幣兌換ノ義務ヲ停止シ、其ノ準備正金ヲ借入ルコト、
六、日本銀行ノ發行權ヲ擴張シ、其報償トシテ、低利若シクハ無利息ニテ銀行ヨリ借入レヲナスコト、
七、普通ノ內債ヲ募集スルコト、
八、普通ノ外債ヲ募集スルコト、
九、從來ノ稅率ヲ增加シ若シクハ新稅ヲ設ルコト、

然レトモ此ノ方法中其ノ效果一時ナルモノアリ、經久ナルモノアリ、或ハ財產上尋常ノ手段ト稱スヘキモノアリ、或ハ非常手段ナルモノアリ、又タ苟モ國家危急ノ塲合ニアラサレハ之レヲ採用スルニモ先後ノ順序自然ニ存スルモノトス、抑ゝ開戰中政治家カ財政上ノ大經綸ヲナスニハ勉メテ經濟上普通ノ法則ニ遵據シ、尋常ノ手段ニヨリ、一方ニ於テハ豐カニ軍資ヲ供給シ、曉將、勇卒ヲシテ、更ニ內顧ノ憂ナカラシメ、他方ニ

於テハ國家ノ經濟機關ヲ擾亂スルコトナク、生產事業ヲ妨害スルコトナク、國家ノ財源ヲシテ大河ノ混々トシテ盡キサルカ如クナラシムルコトヲ期スヘシ、若シ尋常ノ手段ヲ採用スヘキ塲合ニ於テ漫リニ非常手段ニ訴フルカ如キコトアルトキハ、啻タニ生產事業ヲ妨害スルノミナラス、一國財政ノ基礎鞏固ナラサルコトヲ中外ニ表彰シ、國家ノ損耗スル所實ニ少ナカラサルヘシ、開戰ノ塲合ニ於テ大國ノ財政ヲ經綸スル宜シク綽々トシテ常ニ餘裕アルコトヲ示サヽルヘカラス、我國現時ノ問題ハ如何ナル方法ヲ以テ軍資ヲ供給セハ、最モ我カ產業社會ヲ動搖スルコト少ナキヤヽ、是レ余カ軍事財政策ナルモノヲ草シテ世ノ高論ニ質ス所以ナリ、

第一、義捐金募集ノ如キハ財政策トシテハ毫モ賴ムニ足ラサルナリ、抑〻國家危急ノ塲合ニ於テハ吾人臣民ハ忠君愛國ノ精神ヲ表彰スヘキ時機ニシテ吾人ノ私有財產ハ總テ國家ノ財產タルコトヲ認メサルヘカラス、此時ニ際シ吾人ハ勤勉節約各〻其ノ分ニ應シテ軍資ヲ獻納スルハ即チ忠勇公ニ奉スル所以ニシテ、男子ハ時計ヲ賣リ、女子ハ笄ヲ鬻リテ可ナリ、國民ヲシテ自ラ振テ軍費ノ負擔ヲナサシムルハ愛國ノ精神ヲ振起シ、人心ノ和合ヲ盛カンニスルノ方法ニシテ、假令其ノ金額ハ軍資ノ一端ヲ償フニ足ラサルモ道德上、政治上、軍事上ニ及ホス間接ノ結果ニ至テハ最モ重大ナルモノヽト云ハサルヘカラス、故ニ余輩ハ自ラ儉勤應分ノ義捐ヲナシ、世間有志ノ計與ニ參ヒ〻盛ンナランコトヲ切望スルモノナリ、然レトモ財政上ノ點ヨリ觀察スルトキハ、義捐金ハ其ノ金額、收入期限共ニ一定セス毫モ賴ムニ足ラサルヲ以テ余輩ノ多辯ヲ要セサルナリ、

第二、國民ノ愛國心ニ訴ヘ低利若シクハ無利息ノ內國債ヲ募集スルハ是レ又タ前項義捐金ニ類スル方法ニシテ、余輩ハ之ヲ尋常ノ手段ト認ムコト能ハス、國家事アルニ際シ、豪富ノ士民ニ獻納金ヲナサシメ、或ハ之レヨリ低利若シクハ無利息ノ借入ヲナスハ中世ニ於テ同數ニ行ハレタルコトニシテ、內外殆ント其ノ歷史ヲ同フスル所ナリ、然レトモ現今ノ如ク政治ノ機關完全シタル時代ニ於テハ、非常ノ塲合ニ非サレハ政府ハ一般ノ市塲ニ訴ヘ、普通ノ利息ヲ拂フテ國債ヲ募集セサルヘカラス、明治十年政府カ第十五國立銀行ヨリ五分ノ利息ヲ以テ千五百萬圓ノ借入ヲナシタルカ如キハ、政府カ當時銀行ニ附與シタル特權ニ對スルノ報酬ニシテ、其ノ利率ノ低廉ナリシハ素ヨリ當然ノコトナリトス、然レトモ斯ル特別ノ塲合ヲ除クノ外ハ豪富ノ士民自ラ振テ獻納金ヲナシ、或ハ特ニ低利ヲ以テ金員ノ用達ヲナスカ如キハ是レ義捐金ノ一種ナリ、政府自ラ國債ヲ募集スルトキハ必ス普通ノ利息ヲ拂ハサルヘカラス、余輩ハ今回政府カ軍事公債ヲ募集スルニ際シ、其ノ最低應募價格ヲ百圓トシ、現今行ハル、一般ノ利率ヨリ聊低利ノ國債ヲ發行セントスルハ窃カニ財政策ノ宜シキヲ得サルヲ嘆スルナリ、抑金利ナルモノハ經濟社會自然ノ情勢ニヨリテ定マルモノニシテ、政府ノ力

能ク左右シ得ヘキモノヲ非サルナリ、政府ニ於テ強テ低利ノ公債ヲ發行スルトモ一般利息騰貴ノ大勢ハ決シテ之ヲ以テ挽回スヘカラス、昨今整理公債ノ價格ハ九十八圓五十錢内外ニシテ、額面ヲ下ルコト僅カニ一圓五十錢ニ過キス、若シ軍事公債ヲ募集スルニ純然タル高價發行法ヲ用ヒ、最低應募價格ノ制限ヲ附セストモ、政府ノ損亡スル所決シテ多カラサルヘシ、利息騰貴ノ生産社會ニ實アルコトヲ認メナハ、政府ハ之ヲ制スルノ策ニ乏シカラサルヘシ、若シ國民愛國ノ精神ヲ中外ニ表彰セント欲セハ、一般人民ヨリ大ニ義捐金ヲ獻納セシメテ可ナリ、財政上ノ必要ヨリ國債ヲ募集スルトキハ必ス尋常ノ手段ニヨリ、國民商業的ノ動念ニ訴ヘサルヘカラス、然ラサレハ國家財政ノ基礎薄弱ナルノ外觀ヲ世人ニ與フルノ恐レアルナリ、余輩窃カニ之ヲ道路ノ風説ニ聞ク、政府ハ當初一般市場ニ行ハルヘキ價格ニヨリ軍事公債ヲ發行スルノ意ナリシカ、東京ニアル有數ノ豪商、銀行家等公債募集ノ結果トシテ金融逼迫シ、公債株式ノ價格下落センコトヲ恐レ、特更ニ低利公債ノ發行ヲ請願シ、自ラ發行高半額以上ヲ引受ケタリト云フ、果シテ然ラハ今回低利公債ノ發行ハ愛國者ノ微衷ニ出タルモノニシテ、政府ノ意ニ非サルヤ明カナリ、余輩風説ノ事實ナランコトヲ切望シテ止マサルナリ、

第三、剩餘金ハ豫算ニ其ノ用途ヲ指定セサル國庫金ニシテ臨時緊急ノ政費ヲ支辨スルニ最モ適當ナル財源ナリ、幸ニシテ我國ニ於テハ議會開設以來年々政費ヲ節減シ其ノ改革未タ歲入ノ源ナル稅法ニ及ハサリシカ故ニ、國庫ニ剩餘金ヲ生スルコト少ナカラス、明治二十七年度ノ歲入歲出總豫算說明ニ據レハ明治二十五年度ノ終ニ於テ未タ其ノ用途ヲ指定セサル剩餘金百八拾八萬四千三百六十六圓餘アリ、又タ二十六年度ニ於テハ六百五十二萬九千三百七十八圓餘ノ剩餘アルヘキ豫算ナリ、又タ本年度ニ於テモ再ヒ前年度ノ豫算ヲ實施シツヽアルカ故ニ、年度末ニ於テハ總計一千四百九十四萬三千一百二十二圓餘ノ剩餘ヲ生スルノ豫算ナルヘシ、

今回ノ事變ニ際シ軍費ハ先ツ此ノ資金ヨリ支辨スヘキハ實ニ自然ノ順序ナリトス、軍事財政上斯ル剩餘金ノ年々國庫ニ存スルハ頗ル便利ナルモノニシテ、假令今回ノ戰爭ノ爲メニ一億萬圓以上ノ國債ヲ募集スルモ、我政府ハ別ニ財政ノ基礎ヲ動カサスシテ其ノ利子ヲ支拂フコトヲ得ヘシ、斯ル情態ハ歐米ノ軍事財政ノ歷史上殆ント其ノ類例ヲ見サル所ニシテ、余輩ハ我國現時ノ財政ハ最モ強國ナル基礎ヲ有スルコトヲ内外ニ誇稱セント欲スルモノナリ、然レトモ軍費ノ需用ニ比シテハ剩餘金ハ其ノ金額頗ル僅少ナルモノニシテ、開戰中ハ決シテ賴ムニ足ルヘキ財源ニアラサルヤ明カナリ、

大藏省預金、紙幣交換基金、鐵道公債金、中央備荒貯蓄金、其他特別會計ニ屬スル資金ヲ軍費ニ流用スルトキ

キハ政府ハ少クトモ六七千萬圓ノ軍資ヲ得ヘシ、是レ勅令第百四十三號ノ發布アリシ所以ナリ、然レトモ是レ會計上一時政府ニ低利若シクハ無利息ノ資金ヲ供給スルモノニシテ、早晩之ヲ補充セサルヘカラス、故ニ公債其他ノ方法ニヨリテ軍資ヲ募集スルコトハ到底之ヲ免カルヘカラス、

第四、官有鐵道、其他ノ官有物ヲ拂下ケテ軍資ヲ得ヘシト論スルモノアリ、我カ官有鐵道ハ六千萬圓以上ノ價格アリト云ヒ、若シ之レニ官有電信ヲ加ヘナハ一億萬圓ノ軍資ハ立チトコロニ之ヲ調ルコトヲ得ヘシ、然レトモ開戰ノ場合ニ際シ、官有物ヲ賣却スルカ如キハ、不換紙幣ト雖モ決シテ著シキ下落ヲナスモノニ非サルナリ、一八七〇年普佛戰爭アルニ際シ、佛國政府ハ佛蘭西銀行ニ命シテ紙幣兌換ノ義務ヲ停止シ、開戰以テ大ニ軍資ヲ補充スルコトヲ得タリ、又タ前世紀ノ終リニ當リ英國カ一世拿破崙ト戰フニ際シ、時ノ宰相「ピット」ハ英倫銀行ヲ利用シ、其ノ紙幣兌換ノ義務ヲ停止シ、準備正金ノ借入レヲナスコトアリキ、此ノ財政策タルヤ國家危急ノ場合ニ所スルニハ其ノ効果頗ル大ナルモノナリ、然レトモ之レヲ我國現時ノ場合ニ適用セントスルハ實ニ大早計タルヲ免カレサルモノナリ、

抑ゝ中央銀行ノ貯藏スル準備正金ハ國家財政ノ基礎ナリ、鞏固ナル兌換紙幣ノ制度ハ商業上ノ信用ヲ維持スルニ最モ必要ナルモノトス、日清戰爭ハ何時迄經續ス

ニ充ツヘシト、中央銀行ノ正金ヲ備フルハ紙幣兌換ノ爲メナリト雖モ、又タ非常軍用金ノ性質アルハ世人ノ皆ナ知ル所ナリ、我國ニ於テハ銀貨下落ノ結果トシテ近年正金ノ輸入夥シク、日本銀行ノ準備正金モ今ヤ七千七百十八萬四千八百二十圓ノ巨額ニ達シタリ、若シ一時紙幣ノ兌換ヲ停止シ、悉皆此ノ正金ヲ借入ルトキハ、軍資ヲ補充スルコト決シテ少々ニ非サルヘシ、又タ不換紙幣ヲ發行スルトキハ通貨ノ價格大ニ下落スヘシト憂フルモノアリト雖モ、若シ嚴ニ紙幣ノ發行額ヲ制限シ、外國爲替相場ヲ標準トシ、巧ニ其ノ流通高ヲ增減シ、加フルニ政府財政上ノ信用ヲシテ失墜ナカラシメハ、不換紙幣ト雖モ決シテ著シキ下落ヲナスモノニ非サルナリ、一八七〇年普佛戰爭アルニ際シ、佛國政府ハ佛蘭西銀行ニ命シテ紙幣兌換ノ義務ヲ停止シ、開戰以テ大ニ軍資ヲ補充スルコトヲ得タリ、又タ前世紀ノ終リニ當リ英國カ一世拿破崙ト戰フニ際シ、時ノ宰相「ピット」ハ英倫銀行ヲ利用シ、其ノ紙幣兌換ノ義務ヲ停止シ、準備正金ノ借入レヲナスコトアリキ、此ノ財政策タルヤ國家危急ノ場合ニ所スルニハ其ノ効果頗ル大ナルモノナリ、然レトモ之レヲ我國現時ノ場合ニ適用セントスルハ實ニ大早計タルヲ免カレサルモノナリ、

抑ゝ中央銀行ノ貯藏スル準備正金ハ國家財政ノ基礎ナリ、鞏固ナル兌換紙幣ノ制度ハ商業上ノ信用ヲ維持スルニ最モ必要ナルモノトス、日清戰爭ハ何時迄經續ス

ヘキヤ何人モ之ヲ豫期スルコト能ハス、然ルニ今日開戰ノ始メニ當リ漫リニ國家財政ノ基礎ナル準備正金ヲ消耗シ、兌換制ヲ停止スルカ如キコトアラハ、一ニハ國家財政上ノ信用ヲ薄弱ニシ、將來財政ノ運轉ニ一大障害ヲ與ヘ、二ニハ商業上ノ機關ヲ破壞シ、內外貿易ヲ衰微セシメ、遂ニ一國ノ財源ヲ涸ラスニ至ルヘシ、兌換制中止ノ如キハ戰事財政上殆ント最後ノ政策ニシテ此最後ノ手段ヲ採用スル以前ニハ勉メテ國家財政ノ基礎ヲ鞏固ニシ、普通ノ手段、即チ內債、外債、租稅等ニヨリテ軍資ヲ補充スルノ途ヲ講セサルヘカラス、佛國カ一八七〇年八月此ノ財政策ヲ採用セシ如キハ、普國ノ大軍其ノ領內ニ侵入シ、巴黎城ハ日ナラスシテ重圍ノ內ニ陷ラントスル塲合ニシテ尋常ノ財政策ヲ用ユルノ時ニアラサリシカ故ナリ、素ヨリ我國現時ノ塲合ト年ヲ同クシテ語ルヘカラス、

以上余輩ハ各種ノ財政策ヲ列擧シ、現時之ヲ採用スルノ可否ヲ辨明シタリ、今余輩ハ今回開戰中政府ノ採用スヘキ財政上ノ大方針ヲ詳論セントス、余輩ノ意見ハ之ヲ約言スルトキハ大要左ノ如シ、

（一）兌換銀行券條例第二條ヲ改正シ、若干年限ヲ期シ五分利附ノ公債ヲ時價ニテ發行スルコト、

（二）若シ我カ國ノ金利年七分以上ニ騰貴シ、尙ホ軍資ノ必要アルトキハ數千萬圓ノ外國債ヲ募集スルコト、

（四）若シ外國債募集ノ必要アルトキハ之レト同時ニ若干年限ヲ期シ、所得稅、地租、造酒稅、煙草稅等ノ稅率ヲ增加スルコト、

以上ハ軍事財政上余輩ハ之レヲ尋常ノ手段ト稱セント欲ス、此ノ手段ヲ採用セハ開戰中我國生產事業ヲ妨害スルコトナク、容易ニ一億五千萬圓ノ軍資ヲ供給スルコトヲ得ヘシ、若シ更ニ軍資ニ不足ヲ生スルカ如キコトアルトキハ始メテ前段論スル所ノ非常手段ヲ用ユヘシ、是レ自然ノ順序ナリ、

日本銀行發行權ノ擴張、——我國紙幣ノ流通高ハ時ニ增減ナキニ非スト雖モ我生產事業ノ進步ト共ニ其ノ額年々增加セリ、明治二十年四月一日ノ計算ニヨレハ各種紙幣ノ流通總額ハ一億三千一百九十八萬二千二百三十三圓ナリシカ明治二十六年四月一日ニ至リ一億四千三百〇五萬四千六百六十四圓ニ達シタリ、此ノ流通紙幣ハ政府發行紙幣、國立銀行紙幣、兌換銀行券ノ三種ヲ以テ成ルモノニシテ、政府紙幣ハ此年限間低利若シクハ無利息ニテ日本銀行ヨリ正金三千萬圓餘ノ借入レヲナスコト、

政府發行紙幣	一九、二〇〇、〇四四圓
國立銀行紙幣	二三、六二三、六五七圓
兌換銀行券	一〇〇、二三〇、九六三圓
合計	一四三、〇五四、六六四圓

本年八月十八日ニ終ル一週間ノ平均兌換券ノ流通高ハ一億二千二百四十五萬七千七百三十一圓ナリ、政府紙幣ハ近年ノ經驗ニヨレハ一ケ年其ノ銷却高凡ソ七八百萬圓ナリ、故ニ現在ノ流通高ハ凡ソ一千二百萬圓トシテ大過ナカルヘシ、又タ本年五月末ニ於ケル國立銀行紙幣ノ流通高ハ二千二百二十七萬五千六百二十九圓ナリシト云フ、故ニ昨今我國紙幣ノ流通總額ハ凡ソ一億五千五百萬圓内外ナルモノトス、而シテ正貨準備ノ發行ニ日本銀行ノ發行スル兌換銀行券ハ正貨準備ノ發行ニ二種ヲ以テ成ルモノニシテ、保證準備ノ發行高ハ八千五百萬圓ヲ以テ制限トス、但シ此金額中國立銀行發行紙幣ノ流通高ニ均シキ金額ハ之レカ銷却セラルヽニ從テ漸次發行スヘキモノナルカ故ニ、現今實際保證準備ヲ以テ發行シ得ヘキ金額ハ凡ソ六千二三百萬圓ナリトス、

日本銀行ノ紙幣發行ヨリ得ル所ノ利益ハ實ニ此ノ保證準備ノ發行ニ在リトス、然レトモ近年銀貨下落ノ結果トシテ銀塊ノ輸入夥シカリシカ故ニ、正貨準備ノ發行高非常ニ增加セリ、從テ兌換券ノ需用漸次增加スルニ拘ハラス、銀行ハ保證準備ヲ以テ制限迄ノ發行ヲナスコト極メテ稀ナリ、故ニ銀行ハ紙幣發行ヨリ得ヘキ利益ヲ充分ニ收ムルコト能ハス、今余輩ノ發議スル所ハ現行ノ保證準備發行ノ實際制限ヲ二三、六二三、六五七圓ニ更ニ二千五百萬圓ヲ加ヘ、之レト同時ニ準備正金中ヨリ三千萬圓餘ヲ低利若シクハ無利息ニテ政府ニ借上クヘントスルニアリ、斯クノ如クスルトキハ日本銀行カ紙幣發行ヨリ得ル所ノ利益ヲ增加シ、政府ハ其ノ報償トシテ低利ノ軍資ヲ借入ルヽノ便ヲ得ヘシ、余輩ハ現時ノ塲合ニ於テ此ノ改革ヲナスニ毫モ危險ノ虞ナク、金融市塲ヲ整理スルニ其ノ效果少ナカラサルヲ確信スルナリ。抑モ開戰中ハ物價騰貴シ、且ツ軍用品買入、勞銀支拂、其他普通ノ商業取引ニ於テモ現金ヲ使用スルコト大ナリ、故ニ兌換券ノ需用高ハ決シテ將來減少スルコトナカルヘシ、今假リニ其ノ流通額ヲ一億三千萬圓トスルトキハ、假令現行ノ保證準備發行高ヲ增加シテ八千七百萬圓（一億一千萬圓ヨリ國立銀行紙幣ノ流通高ヲ差引タルトナスモ四千萬圓餘ノ正貨準備ハ常ニ日本銀行ヘサルヘカラス、是レ紙幣流通總額ニ對シ殆ント三割ノ正貨準備ナリ、故ニ此ノ改革ヲナストモ毫モ現行兌換制ヲ破ルノ恐レナシトスト雖モ、商業資本又タ日本銀行ハ開戰中金利ノ騰貴ヲ豫防シ、商業資本ノ融通ヲ圓滑ニシ、內外貿易ノ發達ヲ奬勵セサルヘカラス、然ルニ正貨準備ノ紙幣ヲ增加スルトキハ、日本銀行カ手形割引ノ請求ニ應スルノ資力一層增加スルノ結果ヲ生スヘシ、而シテ是レヨリ一般商業社會ニ及フ便利ハ決シテ少々ニアラサル

ヘシ、此ノ議ハ東京經濟雜誌記者ヲ始メ、世間有識ノ士之ヲ唱道スルモノ少ナシトセス、余輩ハ第七議會ニ於テ此ノ改革案ノ直チニ採用セラレンコトヲ切望シテ止マサルナリ、

內國債募集、――軍事公債募集ノ擧ハ余輩ノ大ニ贊成スル所ナリ、抑ゝ開戰ノ始メニ於テハ一國ノ生產資本ニハ多少ノ餘裕ヲ生スルノ勢アリ、此言甚タ奇ナルカ如クナレトモ決シテ然ラサルナリ、戰爭ハ國ノ經濟組織ヲ俄カニ動搖スルモノナリ、人民ハ各ゝ其ノ用度ヲ節シ、重要物產ノ販路閉塞ス、故ニ或種ノ工業ハ從來ノ規摸ヲ經續スルコト能ハス、鐵道其他ノ新事業ハ勿論之ヲ起工スルコト能ハサルナリ、故ニ從來生產的ニ使用セラレタル流動資本ノ內ニ多少ノ餘裕ヲ生シ、新タニ放下ノ途ヲ求ムル資本ハ勿論之ヲ使用スルノ途ナキナリ、此時ニ當リ內債ヲ募集シテ此ノ剩餘ノ資本ヲ吸收スルハ開戰中利益アル他ノ生產事業ヲ運轉スルニ毫モ障害ヲ與ヘサルモノナリ、

我國ニ於テハ開戰以來織業、水產事業等ハ頓ニ販路ノ閉塞ヲ感シタリ、又タ開戰以前各地ニ勃起セントスル鐵道其他ノ新事業ハ總テ中止ノ勢トナレリ、此等ノ源因ニヨリ幾何ノ剩餘資本ヲ社會ニ生セシカ、余輩素ヨリ之ヲ計算スルニ由ナシト雖モ、五六千萬圓ノ軍事公債ヲ募集スルモ決シテ著シク金融市場ヲ逼迫スルノ憂ナカルヘシ、

然レトモ日淸ノ戰爭ハ總テ內國ノ資本ヲ以テ支辨シ得ヘキモノナルヤ、是レ余輩ノ研究スヘキ問題ナリ、我政府ノ信用ヲ以テスルトキハ、勿論如何ナル多額ノ金額モ募集スルヿヲ得ヘシト雖モ、募集金額增加スルニ從ヒ其ノ利率モ亦タ累進セサルヘカラス而シテ公債ノ利子上進スル每ニ株券不動產ノ價格ハ下落シ各種ノ生產事業ハ總テ衰運ニ歸セサルヘカラス、抑ゝ事業ノ興廢ハ金利ノ高低ニ存スルモノニシテ、公債ノ利子七分ニ騰貴スルトキハ資本ニ對シ年七分以下ノ收益アル事業ハ殆ント之ヲ放棄セサルヘカラス、若シ公債ノ年利更ニ騰貴スルカ如キコトアルトキハ、啻タニ新事業ノ起ラサルノミナラス、從來生產事業ニ從事シタル者ハ其ノ固定資本ヲ賣却シテ公債ノ所有者トナリ、怠慢安逸故ニ公債利子ノ騰貴ハ商品ノ生活ヲ貪ルニ至ルヘシ、故ニ公債ノ利子ノ騰貴ハ商品ノ供給ヲ減少シ、物價ヲ高メ、內外貿易ヲ澁滯セシメ、遂ニ一國ノ財源ヲ涸渴スルニ至ルヘシ、

日淸ノ戰爭ハ啻タニ兵力ノ戰爭ニ非ス、又タ經濟上ノ戰爭ナリ、余輩開戰中勉メテ我國ノ產業ヲ培養シ、商業上ノ便利ヲ與ヘ、能ク久シキニ堪ユルノ用意ナカラサルヘカラス、我國民ハ單ニ內地ニ於テ財源ヲ養フノミナラス此機ニ乘シ進テ中立國ノ市場ニ於テ支那ノ得意ヲ奪ヒ、我國ノ貿易ヲ擴張スルノ計ヲナサヽルヘカラス、

然レトモ我內地ノ產業ヲ培養センニハ資本充實セサルヘカラス、金利ノ暴騰ヲ制セサルヘカラス、故ニ金融市場ニ於テ年利七分ニ非サレハ額面ノ價格ニテ公債ヲ

發行スルコト能ハサル塲合ニ達セハ、內債ノ募集ハ之ヲ中止セサルヘカラス、余輩ハ此ノ制限ニ達スル迄ハ尙ホ幾何ノ內債ヲ募集シ得ルヤ、今之ヲ計算スルコトハ甚タ難シト雖モ、若シ更ニ軍資ヲ要スルカ如キコトアルトキハ斷然外資輸入ノ策ヲ講セサルヘカラス、

外國債募集、——歐米各國ニ於テ大戰爭ヲナスヤ、自國ノ資本ノミヲ以テスルモノ極メテ稀ナリ、假令政府ニ於テ公然外債ヲ募集セサルモ、外人ニ株券公債ノ賣買ヲ許スカ故ニ、開戰中金利少シク騰貴シ、株券、公債ノ價格下落スルヤ、海外ノ資本家ハ爭テ之ヲ購入シ、外國ノ價格ニテ發行シタリ、即チ年七分五厘餘ノ利息ヲ拂ヒタル割合ナリ、然ルニ此公債ハ倫敦市塲ニ於テ其ノ價格漸次騰貴セリ、本年五月十九日發兌ノ倫敦經濟雜誌ノ相塲ニヨレハ額面百磅ノ市價百〇五磅九志ナリトス、即チ年六分六厘餘ノ利率トナルナリ、抑ゝ七分利附外國公債ハ世人ノ知ルカ如ク明治三十年ニ悉皆償還スヘキモノナリ、且ツ其ノ償還ノ方法タルヤ所謂濟崩法ニシテ明治八年ヨリ明治三十年迄毎年元利金ヲ合シテ英貨貳拾壹萬六千磅ヲ支拂フノ約束ナリトス、故ニ其ノ金額ハ漸々減少シ、明治二十四年四月一日ノ現計ニヨレハ當時金銀ノ相塲ニ換算シテ未償還額五百十八萬〇百二十圓餘ニ過キス、今日ニ至リテハ其ノ金額ノ更ニ減少シタルヤ明カナリ、其ノ償還年限僅カニ三ケ年ヲ餘シ、且ツ此ノ年限中ト雖モ何時償還セラルヽヤ計ルヘカラス、而シテ其ノ未償還額ハ僅カニ七八十萬磅ニ過キス、是レ株式市塲ノ所謂「端株」ニシテ其ノ賣買價格ノ

ヲ禁スルカ故ニ、勿論之ヲ輸出スヘカラス、又タ銀行ノ働キニヨリ海外ヨリ資本ヲ吸集スルノ途殆ントアルコトナシ、故ニ政府ヨリ公然外債ヲ募集スルニ非サレハ資本ノ欠乏ハ到底之ヲ補充スルコト能サルナリ、故ニ余輩ハ生產資本ノ欠乏ヲ生スルノ徵候ヲ見ルトキハ直チニ外債募集ニ着手センコトヲ切望スルナリ、

維新以來我國財政上ノ信用ハ歐洲ノ市塲ニ於テ著シク增進セリ、七分利附外國公債ハ明治五年英國ニ於テ募集シタルモノナリ當時公債面百磅ニツキ九十二磅半ノ價格ニテ發行シタリ、即チ年七分五厘餘ノ利息ヲ拂ヒタル割合ナリ、然ルニ此公債ハ倫敦市塲ニ於テ其ノ價格漸次騰貴セリ、本年五月十九日發兌ノ倫敦經濟雜誌ノ相塲ニヨレハ額面百磅ノ市價百〇五磅九志ナリトス、即チ年六分六厘餘ノ利率トナルナリ、抑ゝ七分利附外國公債ハ世人ノ知ルカ如ク明治三十年ニ悉皆償還スヘキモノナリ、且ツ其ノ償還ノ方法タルヤ所謂濟崩法ニシテ明治八年ヨリ明治三十年迄毎年元利金ヲ合シテ英貨貳拾壹萬六千磅ヲ支拂フノ約束ナリトス、故ニ其ノ金額ハ漸々減少シ、明治二十四年四月一日ノ現計ニヨレハ當時金銀ノ相塲ニ換算シテ未償還額五百十八萬〇百二十圓餘ニ過キス、今日ニ至リテハ其ノ金額ノ更ニ減少シタルヤ明カナリ、其ノ償還年限僅カニ三ケ年ヲ餘シ、且ツ此ノ年限中ト雖モ何時償還セラルヽヤ計ルヘカラス、而シテ其ノ未償還額ハ僅カニ七八十萬磅ニ過キス、是レ株式市塲ノ所謂「端株」ニシテ其ノ賣買價格ノ

高カラン コト素ヨリ望ムヘカラサルナリ、故ニ七分利附外國公債ノ相場ヲ以テ歐洲ノ市場ニ於ケル我政府ノ信用ヲトスルニ足ラス、若シ我カ整理公債ト同一ノ條件テ附シ彼地ニ於テ多額ノ公債ヲ募集セハ年利六分以下ニテ平價以上ノ發行ヲナスコトヲ得ルハ余輩ノ毫モ疑ハサル所ナリ、

故ニ我國ニ於テ內國債ノ利率七分以上ニ騰貴スルトキハ、歐洲市場ニ於テ大ニ外國債ヲ募集シ、資本ノ欠乏ヲ補充シ以テ我金融市場ヲ緩和シ、生產事業ヲ培養セサルヘカラス、是レ彼レノ餘ス所ヲ以テ我カ不足スル所ヲ補フ所以ニシテ、彼我ノ國力ヲ平均スルノ途實ニ茲ニ存スルナリ、人或ハ外債募集ヲ以テ外國政府ノ干涉ヲ招クノ端緒ヲ開クモノトシ、埃及、南米諸國ヲ例トスルモノアリ、然レトモ是レ現時世界ニ於ケル日本ノ地位ヲ知ラス、又タ理財上ノ事情ニ通セサル者ノ言ニシテ素ヨリ共ニ軍事財政ヲ談スヘカラス、

稅率ノ增加、——外債ヲ募集セハ之レト同時ニ經常歲入ヲ增加スルノ途ヲ講セサルヘカラス、現時年々國庫ニ生スルノ餘剩金ハ將來募集スヘキ軍事公債ノ利子及ヒ戰後ノ國防費ニ充ツルトキハ殘ス所多カラサルヘシ、故ニ巨額ノ外債ヲ募集スルトキハ、新タニ財源ヲ求メテ元利償還ノ準備ヲナサヽルヘカラス、此ノ財源ヲ得ルニハ或ハ新稅ヲ徵收スヘク、或ハ舊稅ノ稅率ヲ增加スヘシ、余輩ハ寧ロ第二ノ方法ヲ贊成スルモノナリ、若シ實際此ノ問題ヲ生スルカ如キコトアルトキハ、余輩ハ更ニ意見ヲ開陳シテ公論ニ質サント欲ス、

之ヲ要スルニ今回軍資供給ノ問題ハ一ツニ將來軍隊ノ運動如何ニヨリテ決セサルヘカラス、若シ數ケ月ニシテ名譽アル平和ヲ以テ事局ヲ結フコトヲ得ヘクハ兌換券ノ增發內國債ノ募集ハ或ハ豐カニ軍資供給ノ目的ヲ達スルヿヲ得ヘシ、若シ不幸ニテ開戰年餘ニ亘ラハ外債ノ募集租稅ノ增加ハ遂ニ免カルヘカラサルナリ、而シテ尙ホ軍資ニ不足ヲ生スルカ如キコトアルトキハ、兌換制ヲ停止スルモ可ナリ、公債ノ强迫募集亦タ可ナリ、然レトモ非常手段ハ財政上常ニ最後ノ政策タラサルヘカラス、凡ソ財政問題ハ經濟上自然ノ法則ニ遵據シテ所理スヘキモノナリ、故ニ之レヲ經綸スルヤ極メテ簡明ニ之レヲ實行スルヤ極メテ敢勇、機敏ナラサルヘカラス、故ニ第七議會ニ於テハ財政問題ハ之ヲ政治問題以外ニ措キ、官民協同シテ軍事財政策ヲ定メ、開戰中我國財政上ノ成效ヲシテ尙ホ軍器上ノ勝利ノ如クナラシメサルヘカラス、是レ余輩ノ切望スル所ナリ、

藻鹽草

一語千金

眞ナル物ノ外ニ美ナル物ナシ眞ナル物獨リ愛スベシ　ポアロウ

Rien n'est beau que le vrais; le vrai seul est aimable (Nothing but truth is beautiful; truth is alone lovable)

—Boileau.

詩ク時ニハ穫ルコトヲ忘ルヽ勿レ—然リ我ヲシテ播種ノ時ニ早クモ

ラズテル

穫ルコトヲ考ヘシメヨ

Vergisz nicht der Ernte beim Saeen,—und lasz mich beim Saeen der Ernte nicht vergessen! (forget not the harvest when sowing—and let me not when sowing forget not the harvest).

—Lavater.

火焔ノ用モ亦廣イ哉—コレヲ利導スルニ於テヲ

シルレル

Wohlthaetig ist des Feuers Macht,

Wenn sie des Mensch bezaehmt, bewahrt. (beneficent is the power of fire, when man matches and restrain it).

—Schiller.

演劇秘密談（第一）

櫻痴居士

○余が脚本を讀みたる起由

余が筆を脚本に採りて漫に演劇の改良を實行せんと望めるは敢て一朝の故に非ず、蓋し宿緣ありて然るものゝ如し。余は十七歳まで家君の慈愛なる膝下に養はれて專ら教育を家庭に受けたりしが、庭訓頗る嚴格にして大抵朝の六時より夜の十時に至るまでの間に於て、遊戯休息の時間は三食湯浴を併せて、七時間くらゐに限られ、其餘の八九時間は讀書修行の日課に供し家君はおのれ風流優美の事を樂とし詩文の外に和歌連歌俳諧點茶など好み玉ひ時として絲竹をも聽き演劇なども人に伴はれては見物し玉ひ慈母にも觀劇を許させ玉ひしに獨り余に限りては痛く之を禁ぜられ偶〻慈母が家君の他出を機として竊に余を携へ墓參の歸路に田舍芝居の一幕をも見せ玉へる事ありしかどもあな畏こゝ決して此事を父上御前にて語りなせぞと常に注意し玉ひき、然るを稚心の淺間にも面白さの餘りに慈母の誡を打忘れて或とき家君の前にて姉たちに對ひ芝居の話を口外したりしに家君は大に怒らせ玉ひて學問修行の身がさる遊蕩の擧動ありて良かるべきかと余を叱らせ併て慈母にまで及ばせ玉ひし事ありき。是に懲りて其後は曾て劇場を觀たる事はあらざりけり、されば生れてより十七年の間は長崎に在りて田舍芝居を見物したるは前後三四回にはすぎざりしなり。其後江戸に來りて書生となり續て小吏となりて後も時々家族を伴ひ又は朋友に誘はれて猿

若町の演劇を見物したる事ありしかど家訓の薫陶の殘りたる上は武士たるものは脫刀場に立入る事を禁ぜられたるに由り面白とは思ひながらも先づ遠慮して屢〻其後幕府初度の遣歐公使に隨從して初めて西洋諸國に赴きたりし時に彼諸國にて非常なる優待をば到る處にて受けたるに當り觀劇は晩餐と俱に欠く可からざるの招待となされたり、尤も言語が解らねば其詞歌謠の意味も通ぜざりしかど面白きものは矢張り面白ければ此時よりして余は芝居好に成り、歸朝の後に我劇を見て更に一層の妙味を覺えたり、されども是を遊戲視して別に所感を懷く程の事は無かりしが、其後數度の歐米官遊に於て演劇の忽がせにすべからざる事など聽もし讀もして初めて一種の感覺を腦裏に起し若し時機もあらば我亦之を試んと思ひ初め歐洲諸名家のものせられたる脚本などをも暇あれば讀閱する事を初めたり是れ明治五年頃の事なりき

斯の如く余が演劇の發心は初め歐米にありて感得したるに付き其後は日本に歸りても頻りに觀劇に耽りて無上の樂となし新聞紙に從事せるに當りては自から文筆の餘暇もありしなればいでや脚本に志して見んものをと思ひ立ち、先づ鶴屋南北梅田治助瀨川如皐河竹新七諸氏の筆になれる脚本を借り得て之を閱したるに其荒唐杜撰にして文章の拙劣なる立案の放縱なる實に見るに堪へざるの思を成したり。是にては迚も讀むも詮なし院本に至りては流石かくは非ざるべしと考へて近松門左衛門紀海音竹田出雲松田和吉諸輩の院本を遍く蒐集して讀閱幾ど五百部に至りしが是とても其放縱荒唐なるは脚本に伯仲して遂に余をして讀むを厭はしむるに至れり。いかなれば我國の作家が院本脚本に於ける彼の歐洲諸國の作家に比して斯くはいたく劣れるぞ此狀にては日本の演劇をして其地歩を進めしめんなどゝは思ひも寄らぬ事どもなり斯る妄想の爲にあたら光陰を院本脚本の讀閱に費したる事の愚かさよと我から我愚を嗤ひて此念を絶たりき

其より數年の後にふと思ひ付けるは我が曩に我國諸作家の脚本院本を一概に拋却したるは我識見の足らざりしの所に出たり洋の東西と時の古今とを問はず苟も之を場に上ぼせて觀者をして喜怒哀樂の感情を起さしめ以て快樂を與ふるもの豈に妙所の其間に存して然るもの無かるべけんや抑も彼脚本院本中果して如何の妙所かある試に之を發見せんと思ひ立ちて再び讀閱したるに妙

趣巧案實に人意の表に出るもの卷中に陸續たる尋常凡庸作家の企て及ばざるもの甚だ多し殊に多數の中にて二百年後百年後の今日まで生存するものに至りては實に傑作中の傑作たる爭ふ可からざるの事實なりとす。是に於ては余は深く余が前日の妄斷を悔ゐ節を折りて是を讀閱したるに到底歐洲諸作家に比して力を用ひたる所を異にすれども人性の感情に訴ふるの妙に至りては即ち其揆を一にするを知り得たり

○演劇の中世より墮落したる由來

余は此所に於て敢て我演劇の歷史を述ぶるものに非ずと雖し且は武士の品行を矯んが爲に市尹某の建議を採用し盖し寬永頃より我江戶に興りたる演劇（即ち歌舞伎狂言）は專ら勇壯活潑を旨とし市川家荒事の如き尤も當世の時好に適ひたりしが、其艷妖冶麗の風を爲したるは實に上方（京阪）より傳播したるなり、然れども元祿寶永の頃までは流石に未だ江戶狂言は猥褻に墮落せず上方狂言とても猶其甚しきに至らざりしが其享保に至りて一變したるは脫刀の令に起りたるが如し

德川氏の國初以來元祿寶永の頃までは文化も未だ今日の如くに洽ねからざりければ倫理品行に關しても社會の制裁は今日の如くに嚴ならず、諸大名旗本を初めとして諸國の武士が江戶に於て狹邪の地に足を容れて花柳の樂を買ふ事も敢て不品行と認められざるを以て上流の侯伯士大夫が白晝公然と馬に跨りて吉原に通ひたるは尋常の事なりけり。其爲に吉原の廓中にては或は買論あるひは鞘當等より武士の爭鬪を惹起し之に加ふるに武家奴町奴等が喧嘩を業躰の如くに心得て酒を使ひ武を弄ぶの風ありて遊廓は血を流すの修羅場と變ずるを罕しからぬ樣に成つたりければ幕府は此惡弊を制令を布きたり。抑も武士は佩刀を離すを以て不覺の極となし武士は厠に上ぼるにも一刀を離さずと云へる諺の如く場合に由りて大刀は身邊より遠ざくる事ありとも小刀は常に之を帶に挾むを常とせり、若も無刀にて變事起る時は何等の理由ありとも分疏は相立たざるが當時の例なりき。然るに今や吉原は脫刀場所と成つたれば武士が登樓するに當りては大小とも階下にて樓主に預け置きて其身は無刀にて樓に上らざる可からず（維新の前までは嚴に此例を實行し吉原に遊ぶ武士は其大小とも茶屋もしくは遊女屋の帳場に預けたるな

り）故に武士たるものが吉原の大門を跨ぎて内に入たる以上は若し喧嘩口論に及び何程の正理ありとも脱刀場所に立入たりと云ふ廉を以て非分に陥り其罪を被ふる事と成たりけり、是に由て吉原は脱刀場所と成たるを以て廓中の喧嘩も其跡を斂め武士の品行は此時よりして罪科に處せらるゝ事の恐しさに著く方正に成たりと云へり

然るに江戸の芝居は固より武士の見物を禁じたるに非されば大小を挿みながら観劇を常としたるに兎角に其争闘を見ると多かりければ座主等は之を厭ひて市の廳に願書を捧げ歌舞伎狂言芝居の儀も吉原と同様に脱刀場所と御定め被下度と請ひたれば市尹は其願意を採用して諸芝居は以来脱刀場所たるべしと布令したりき。吉原の遊廓は其性質が武士の立入るまじき場所たり芝居は之に異なりて立入ても差構なき場所たるに拘らず同じ脱刀場所たる以上は脱刀の故を以て問はるゝに付き其結果は同様に武士を制裁したり（故に維新前は芝居茶屋に大小を預け無刀にて木戸を入たるなり）斯る次第なれば町方の見廻の復命にも吉原の方は御旗本御家人は勿論軽輩に至るまで徘徊いたし居り不申候と上申し若し幕士の見物せるを見受る時は斟酌なく密告したれども芝居に至りては之に反し偶ゝ幕士の見物せるを見ても御旗本御家人は見物いたし居り不申候尤も軽輩躰のものは見受申候と聞けり。然れども脱刀場所と定まつたる悲しさには芝居好の武士は其足を木戸内に容るゝと能はざるは恰も吉原の大門に於けるに同くして上流の観客は此法令の為に足跡を芝居に絶たりき

大政府の所在地たる江戸にて斯の如くに定まつたりければ京大阪は云ふも更なり諸國の芝居みな盡く脱刀場所と成たるが為に武士の観客その跡を絶ち其餘の見物は當時の社會にて下流と卑しめられたる町人百姓のみと成たりけり。勿論その頃に於ては理非を辨へ義俠を喜び兼ては優美なる言語擧動を知つたる上流は概ね武士の社會に屬し農工商は大抵下流の野鄙なるに止まつたるは事實に於て然る所にてありければ江戸大阪の劇場は此急激なる法令に由つて其観客の種類を全く一變せられたり。観客の多數は既に一變したり其好尚も亦大に趣を殊にしたり、演劇の趣向も亦いかんぞ観客の好尚に應じて變化せざる可けんや、是に於てか座主は俳優を語らひて作者に需むるに下流の好尚に應ずべき脚本の立案を以てし、作者は需に應じて世に媚び好を博

するの趣向を立て、新奇を爭ひたりければ遊女は場中に無くて叶はざる趣向の材料となり遊治郎放蕩子息藝子伸居末社幇間その必要となり果は心中情死が尤も流行の考案と成るに至り京阪の劇場に於て先づ其喝采を得て江戸に及ぼし遂に演劇をして淫奔猥褻の博覽場と變じて淺ましき境界に陷らしめたりき。讀者もし享保以前の院本脚本を將て是を其以後のものに比較せば必らず余が此說の妄誕ならざるを證し得べきなり（春臺獨語に此間に於ける演劇の變遷を記したるが屈竟の證據なり）

○文章部俗、趣向荒唐

今や明治廿七年の今日に於て學者仲間の諸文豪が演劇を評するに、文章部俗、趣向荒唐なりの語を以てせらるゝは至極の適評にして余も亦た實に其然るを知るなり。然れども其部俗も其荒唐も由つて來れるの因なくばあらず、其因を究めて之を知ると盡し讀者の爲に無用にも非ざるべき歟。盡し演劇の變遷を案ずるに其初や演劇は歌舞伎と名けられて猿樂および狂言（俗に云ふ間狂言）より轉化し來りて悲劇と喜劇の二種となりて頗る其業を發達し竹本義太夫の出るに値ひて文豪の作家を乞ひ五卷十二段或は三卷六段の著作を乞ひ之に節曲を下し三絃に和し絶妙の音調を以て其文章を語り靈妙なる木偶の動作を以て其事を演ぜしめたり、所謂假名手本忠臣藏義經千本櫻菅原傳授手習鑑妹背山婦女庭訓等の淨琉璃は皆この操狂言に於て演ぜられたる名劇なり。但し竹本が出たる前の淨琉璃は概ね說經に基つきて土佐井上等の如きは其文章も稍〻高雅なりしが脫刀法令以後に於て近松が義太夫の爲に書たる院本より文章大に一變して趣向と俱に下流の好尙に投せんが爲に臺詞には飽まで部俗の語を用ひたれば當時『土佐上下に義太股引』の批評あるに至れり、然れども其部俗は臺詞のみに限られ敍事の文に至りては高妙宏麗にして詩賦の上乘に位せるもの篇中に燦爛たり況や臺詞をも巧に部俗の言語を以て微妙の情を寫し出し眞摯豪宕なるものに乏しからざりしなり。此に歌舞伎は彼の操の發達を見て爭でか之を等閑に看過すべき彼が木偶にて演ずる所を將て直に之を俳優の動作に施して從前の演劇を一變したりしが彼淨琉璃の敍事詩賦は操狂言にこそ緊要なれ演劇には緊要ならざる所あるのみならず或は爲に俳優の動作に妨あるを以て之を刪除し又は操と名づけ語りものに合せて木偶を舞はしたるものあり專ら一幕ものを演じたるなり、此に歌舞伎と同時に

改竄を加ふる事となせり。是れ操は淨琉璃を主として木偶これが客たれども歌舞伎は之に反し俳優の動作その主となりて其詞も俳優みづから之を述べ敘事の淨琉璃の如きは全く塲上の附屬物と成りたればなり（今日に至るまで竹本豐竹の大夫等が劇塲の淨琉璃を語る大夫は之をチヨボと名けて齒せず已れ等は俳優が默演するに非ざれば劇塲に出でゝ語る事を肯せざるも此理由に出でゝ頑に古例を墨守するが故なり）されば耳に聞くを旨とせる淨琉璃をば目に見るを主とするの演劇に移したるを以て鄙俗なる臺詞のみ其用をなして高妙なる敘事の詩賦は贅物となり其上に其臺詞の如きも觀客の下流なるに伴はれて次第々々に鄙俗には陷つたるなり

趣向の荒唐なるは是以て同じ狀況にして畢竟は下流の習ひとして觀客が其目を喜ばしむるを好み全編の趣意は徃々之を問はざるに出でたるが如し。既に土佐井上の古淨琉璃及び近松が初作の如きは一編の淨琉璃に其主人公を定めて筆を採りたるに竹田出雲等以降に至りては復その主人公あるを見ず毎段毎齣各〻其主人公を異にしたり、試に忠臣藏を見よ由良之助果して主人公たるか、千本櫻は義經決して主人公に非ざるなり、妹背山廿四孝一の谷等みな盡く然らざるは莫し、其然る所以のものは若し脚本院本の全編に通じて其主人公を設くる時は例ば全編五幕の中にて絶妙の界は二ケ所か三ケ所に止まりて其他は其因を示すの襯染たるを免かれずして或は下流の觀客をして欠伸を生ぜしむるの憂あり是に反して毎齣その主人公を別にすれば其憂なきのみならず趣向も亦從つて別境界を顯はし大に耳目を新にするの利あり、今の作者が『以て一大秘訣とするは即ち此故なり、況や俳優の中に』は『役不足（やくぶそく）』を唱ふもの多くして實際全編の主人公を設けて專ら是に重きを置く事を妨くるの弊あるに於てをや（此事は後に詳述すべし）斯の如きが故に目前（めさき）を變（かへ）るの必要に迫られて全編の骨子を失ひて徒らに新奇を衒ひ荒唐なる夢幻の如き劇を演し評者をして支離滅裂の嘆あらしむるに至れり。然らば則ち臺詞の高尚と趣向の貫徹とは今日の狂言作者と雖ども中心是を冀はざるに非ず實は容易に是を改良すること能はざるのみ、而して是を改良し能はざる所以のものは觀客の聽視を改良するは悲い哉凡庸作者にては其筆力の及ばざる所たるが故なり

ドストエーフスキイの『損辱』（八）

不知庵主人

ヘレンは人別れぬ深山猿の如く總ての人を以て己れの敵と考ふればバブノフの殘酷も左までには辛からずして一圖に人間は惡魔の化生なりと思込みて此妖婆の如きは勿論々々人間のすべき事をなしゝのみと信じ却て此中より匂引全樣に救ふて呉れし人の心根の知りがたきを危み伴れられし其晩は訝かしさと恐ろしさに加へて神の勞れも甚だしければツイとろ〳〵とまどろみしが其翌日朝夙く目覺めて疑念の晴れやらぬにむづかしき顏するも無理ならざるべし。

ヘレンは無言にて主人を睨視せり。主人は湯を沸して朝餐の支度をなしヘレンに向て物欲しからずやと尋ねたれどヘレンは再び無言にて睨視せり。

十時となりし頃約束しつる醫師はヘレンを診察なさんとて來れり。然れどもヘレンは診察を受くるを嫌ひて己れの脈を取らんとする醫師の手を拂ひ舌を見せろといふを知らぬ顏して堅く口を結びあまつさへ拳を上げて此老實なる醫師を毆打したれば。主人のイワンは氣の毒がりて此の兒供の執拗なるには少しく仔細あれば曲げて怨させ給へと陳謝しける。

人には天賦の權あり。知識あると否とを問はず何人も自由ならん事を欲するは自然なり。人に天賦の權なるものあるを意識すると否とに關らず、又果して斯るもの有りや無しやを疑ふにも關らず、智者も愚者も諸共に我が好めるまゝに處して餘人の爲に此自由を妨碍せらるゝを欲せざるなり。ヘレンが水子思想より産出せし覺束なき人世觀より見ればバブノフより虐使せらるゝ事の苦は本よりいふ迄もなけれども此苦中に身を投じ甘んじて其の鞭撻に忍ぶは己れが勝手にして餘人の干係すべき限りにあらざるなり。バブノフは我が母にいっはり金を貸し我が母の葬式を營みし人なれば（此事の虚誕なるは渠の女が知らざる處なるをもて）縱令無慈悲にも苛使せらるゝとも恩人は何處までも恩人らしくせざるべからず、寧ろ鞭撻を受けて終には其の呵責に到るとも母が脊負ひし義務を輕ふせんには如かずといふは渠の女の小さき胸に包める道德心なり。且つ渠の女のねぢれたる心より見れば世間は總てバブノフにして其の外面の慈悲らしく見ゆる者も心事を解剖すれば私慾を貪るの徒にあらざるはなし、バブノフの呵責

の辛かるも浮世にある限りは勿論覺悟すべき常事なれば所詮其の鞭撻毆打を免れ得べきにあらず、一のバブノフより遁れて他のバブノフに行くも辛楚は同じ辛楚なれば寧ろ恩あるバブノフより呵責を受くるも恩なき手にて甘んずる呵責を潜越にも憐みて頼みもせぬに仁者顔して救ふて呉れたる人の事こそ心得ね。私慾の塊物たる人間の恩を受くるを毒饅頭を貰ひしよりも恐ろしがる此の我れに強て恩を賣らんとするは抑も我が權利を殘害するものゝ如し甚だしきにあらずやといふはヘレンが胸中の不平にして無言を以て答へ冷然傲睨して醫師の診斷を拒みたるは之が爲なりき。

正直なる獨乙人の醫者は別狀なき由を告げツヽ〳〵にして歸りしのち前夜のマスロボーエフは來りてバブノフの方は首尾よく話をつければ最早心配するに及ばずと云ひ旁〻ヘレンの片意地なる容子を聞きて笑ひながら歸りぬ。此間ヘレンは猶ほ無言にて俯向き折々顔を上げて二人を睨視したりき。

マスロボーエフの歸りしのちヘレンは初めて口を開けり、『今の人は何だエ？』。その聲は震へたれども斷乎として而かも傲然たる色をもてぢッと主人の顔を凝視めたり。

主人のイワンはマスロボーエフの姓氏を告げバブノフの家より渠の女を救ひし時最も盡力せしものなりと話し且つヘレンを救ふにつけての逐一とバブノフがヘレンの母を世話せしにあらざる概略を物語りぬ。

ヘレンは猶ほ半信半疑ながら較や合點したる容子にて多少イワンの信切を感ずると共に是まで受けし苛酷なる折檻を憶出せしが如く、『バブノフは最う來ないか？』と尋ねたりき。如何に頑硬なる薄命の驕兒にもせよ子供は子供なれば「酸辛」と「殘酷」の追憶にさいなまれては必ず冷水を浴びせられたる心地を覺ゆべし。」かくてイワンは藥劑師に行き醫師の殘せし藥方書に依りて藥劑を求め其歸るさに料理店に立寄りてヘレンの爲めに鷄肉の羹汁を求めて歸りしがヘレンは嫌ひて藥も飲まず肉羹も啜らざりしかば。イワンは心配して色々に機嫌を取り柔しき言葉にて頻りに慰めたれば多少打解けたる樣なれど纔祿の中より養ひ來りし片意地は中々容易くは馴染まざりき。暫くにしてヘレンは『貴君は先刻の人に私を何處へ預けるツてたが私は何處へも行かないよ』と云ひ、イワンが外出せんとて帽を取りながら躊躇するや『行つておいでなさい私は寐るから

ら……』と云ひ、『だがお前一人でゐられるかエ？』といふを聞き『關はずお出掛けなさい私が年中病氣だッたら貴君は年中家にゐるかエ』と云ふて微笑を洩しぬ。

而してイワンがイクメーチフとナターシヤを訪ふて日暮れて歸るや、ヘレンは暗中にありて頻りに何事をか呟きてありき。必定錯迷の爲め惱まさるゝ事と思ふて其手を取りて物柔かに尋ねたり。

『どうかおしかエ？』

『私は歸るよ、歸ッた方がいゝ』。

『何處へ、誰の處へ？』

『バブノフの處へ。バブノフはお母さんに金を貸したッてエから……私はお母さんが惡く云はれるのは嫌だから借金を返して仕舞ふまでは働いてやる、返しさへすりやア他へ行くけれど、今は歸る方がいゝ。』

『歸る事は出來ないよ、歸らふもンなら殺されて仕舞ふ。』

『殺したいなら殺すがいゝ』と云ッたッけ、『私よりもッと立派な人がいくらも殺されたッていゝ、私なンぞは殺されたからッて何ンでもないゝ、どうせ生涯貧乏して乞喰になつて死ンで仕舞ふンだ、お母さんが死ぬ時にお前は一生貧乏するンだと云ッたッけ、こンな衣物なンぞが着たいもンか』。

『まだ〳〵お前は長生するのだよ。衣物を買て上げやう、書物を買て上げやう、お前はいつまでも私と一緒にゐるンだ、お前が行きたくないといふなら何處へも遣りやアしない、だから其ンな事を云はないで温和しくしておいで――』

『私は裁縫師にならうかと思ッてゐるがいゝから今其ンな事を云はないでお寐なさい。』

『あア、お前の好きなものになるがいゝ』

ヘレンは涙に暮れしが頓て聲を上げて泣出せり。イワンはその肩を摩でゝさま〴〵に手を盡して介抱りしが益〻身を震はして啜り上ぐるに慰めかねて思はずも胸塞がりし心地ぞしぬ。斯くてヘレンは此夜は泣き寐入に「リオアア」に轉けしが睡りてのちも幾度か夢にうなされて目覺めてはシク〳〵泣き沈み中々にやる瀬なき躰に見えたりける。

富家に生れてまことの父母にあまやかされし乳媼日傘の寵兒も此凄愴なる光景に接せば必ずや涙なきを得ざるべし。人生悲酸の事多しといへども人形を抱きて春風駘蕩の生涯を樂む小女が惡婆の呵責を甘んじて乞喰

となるを屑しとする如きは抑も最極なる悲酸の一にあらずや。

雜錄

軍事叢話（四）

勇　小兒

一千七百九十四年六月一日、ドーヴア海峽に於て英の艦隊大に佛艦隊を擊破し、近世無双の大勝利を得たる其日、英の水師提督ハウ卿旗艦の甲板に立て將士血戰の狀を注目しつゝありしに、偶ま十歳を未だ越へとも見ふる一小兒の毫も臆する色なく彈丸雨飛の間に立つあり。卿之を麾きて之に諭して云ふ、兒よ、卿はあまり年若なり、軍の用にも立つ可からず、早く下に隱れ居よ」と。彼小兒面を赤ふして答へて曰く、貴卿よ、小子若し戰爭中に甲板に留まり居らずば、小子の父は何と申す可きぞ」と。終に下らず。

無頭の手負

英國水師提督ペンバウは一個の水兵より百戰を經て提督の榮職に攀ぢ上れる人なり。曾て或軍艦に乘組みて、大砲を受持ちて、他の一人と共に戰の間違りに發射し居たるに、忽ち敵艦より飛び來りたる大彈丸其一人の脚を射切り去れり。彼れ倒れながらペンバウを呼べば、ペンバウは掃除棹投棄てゝ、手負を肩に昇きのせ、徐かに下なる室に下り行かむとす。ペンバウは已に下り、肩に乘せたる手負の頭まさに甲板と水平になれる時も、飛び來る敵の砲丸忽ち彼手負の首を射切り去れり。然も下なるペンバウは之を知らず。頭無き手負を肩にして下室に下り、軍醫を叫むで手負一人連れ來れりと叫べば、軍醫はふり顧みて大に驚き「呀、貴公は頭の無き男を連れ來りて何にするぞ」。ペンバウは肩なる荷物をさり下ろし、一ト目視て喫驚し、「咄、無首男奴！彼は脚を切られしことを云ひたるに偖は首無しにてありたるか、げにもゝ〳〵彼が云ふ言を信ゝてよかりし例は一度もあらざりけるよ」。

子一の退軍

歷史あつてより尤も慘絶憎懽を極めたるは、一世奈破烈翁の露國に於ける敗北、及其退軍なるか、此暗黑の幕中に一點の光を佛軍の爲めに保ち得たるものは奈翁幕下の名將軍子一の退陣なり。何れの佛軍も寒氣の爲めに、饑餓の爲めに、敵軍襲來の爲めに、隊伍もなく亂敗亂走したるに、獨り子一將軍は其兵を方形の隊に造りて、隊伍を亂さず絶寒絶危の間を靜々と引退き、六千のコサック騎兵か疾颶の如く慕ひ來るをば打拂ひ〳〵退軍せり。其退軍は實に奈翁の露國征伐中尤も光榮あるの一段なりき。然るに佛軍ナイペルを過ぐるや、流石勇將の下にある强卒も最早絶望して、今は事已にやむと思惟したる程なりけれども、子一に就て其令を聞かむと尋れ廻りしに、何ぞ圖らむ子一は雪の堆くなれる後に靜かに地圖を閱してあらむとは。主將の沈勇は士卒に向つて大膽を吹込み、全軍大破の間に獨り子一の一軍は恙なく退くを得たり。

史論

日蓮上人を論ず（三）

外教生

天下の宗敵に對して孤陣を名越の山腹に張りし僧日蓮は尚ほ一年間沈默

を守れり、彼は鶴ケ岡の經藏に入り獨學獨考して彼の心思を養へり、此時に當て攝理は彼に一人の貴重なる共働者を供せり、即ち叡山の學僧成辨と稱するもの、齢は日蓮に一歳を加へ、沈毅溫厚靜寂の士、志望學說の同贊を慕ふて遠路鎌倉に抵りしものなり、二者性を異にして目的を共にせり、成辨は守るに善くして日蓮は戰ふの人なり、前者は内を整へて後者は外に張り、前者は柔に失し後者は剛に過ぎ、一は他の補充性にして一を欠て他は其目的を達する能はず、成辨名を改めて日照と稱し、日蓮第一の弟子なれり、日蓮宗の建設は實に二者の共同事業なり、世が日蓮を稱して日照を思はざるは前者は多く外に現はれて其行爲の顯著なりしが故のみ、恰も獨逸宗教改革事業に於てルーテル現はれてメランクッンの隱るゝが如し、

ノーバリス曰く「若し一人の余に贊同するものある時は余の確信は千百倍の強を致す」と、求めずして得たる日照の贊同は如何に日蓮の確信を強からしめたりしよ、彼は今は建設事業を悉く日照に委れ、回顧の配慮を去て專心他宗の攻撃折伏に從事せり、彼は實に我邦に於ける路傍說教の率先者なり、彼は日々鎌倉辻町の東小町往還の路に立て「諸宗無得道墮地獄」を呼び、彼の獨特の宗義を傳布せり、人あり彼に往還に法を說くの非禮を責むるものあれば、彼は云ふ、「人間は坐して食するを禮とすれども亂軍急場の場合に於ては立て食するも非禮ならず」と、彼の激烈なる他宗駁擊を非難するものに向て彼は云ふ、「出家の身は元來佛の使なり、世を畏れ人に媚て之を云はざるは道に非らず」と、彼は戰時の感念を宗教に適用せしもの、余輩彼の例を求めんと欲すれば舊約時代の預言者に非らざればルーテル彼自身に抵らざるべからず、詩人リヒテルがルーテルを評して「彼の言語は戰爭なり」と云ひしは我の日蓮に適用すべきものなり　白壁抱負日蓮の如きは彼を措て他に我が國史の載せざる所、基督教國に於けるジョン、ノックス、ジョジ、フホックス等の勇敢熱心に比してのみ日蓮の當時を思ひ得るなり。

彼は路傍說教に依りて多くの有力なる信徒を得たり、四條賴基なり、進士善春なり、工藤吉隆なり、池上宗仲なり、荏原義宗なり、南部實長なり、皆な忠武を以て聞へし東國異數の武士なり、北條時代の日本人は今人の如く宗教に冷淡ならざりしなり、彼等は身は豪族の中に算へられ政府樞要の位置を占めしものなりと雖も、路傍說教に耳を峙て、一度び眞理と信ずるに至れば世の嘲弄誹謗を顧みず、直に彼等の信仰を表白するに躊躇せざりしなり、試に思へ、工藤吉隆は房州天津の領主なりし事を、四條賴基は北條の一門江馬遠江守の近臣たりし事を、池上宗仲は東國屈指の豪族たりし事を、而して日蓮の恩人にして終に彼に信服するに至りし富木播磨守胤繼は諸侯の一人なりし事を、是等が名越の貴僧を信仰して彼に師事するに至りしなり、日蓮の豪と邁とは感ずるに餘りあり、然れども是等豪直の士の行爲は我邦今日の社會に於て求めんと欲して能はざる所、余輩の祖先も一時は眞面目なる宗教家なりしなり、彼等に不人望なる味方に組するの勇氣ありしなり、彼等は交際社會の批評を恐れざりし、彼等は宗教的熱心を以て恥となさゞりし、明治の日本には鐵道あり、電信あり、シャムペーン酒あり、花骨牌ありと雖も、然れども建長文永時代の誠實熱心眞面目は其封建政治と共に今は全く失せて迹なし、今日は批評の時代なり、宗教哲學時代なり、「新神學時代」なり、然れども名譽生命を恐れて一宗教に歸依するが如きは今人の敢てせざる所、僧日蓮は狂人なり、彼の徒弟は迷信家なり、如何となれば彼等は今日の眼鏡的批評學者の如く冷淡にして無情ならざりしが故に、彼等は實に誠に宗教を信ぜしが故に。

直接傳道に從事すること六年、彼の信徒の益增加するに及びて彼の確信は益强きを加へたり、彼の心中に十數年間存せし彼の假說は今は生靈の上に試みられて其實蹟を結ぶに至れり、諸宗無得道說佛法惟一說は今は多くの贊同者を得て全く疑ふべからざるに至れり、時に康元元年關東に大洪水あり、其年六月十四日には鶴ケ岡八幡宮の社震動せり、同日白晝に飛星を見たり、翌正嘉元年には月蝕日蝕共に異例なり、五月十八日大地震と共に海水泥に變ぜり、夏旱魃甚しく田畑涸乾て野に一株の生草を示して終るまでを問答躰に書き綴りしなり、(幸田露伴氏の「少年文學」に於ける明晰なる解剖に依る)。

是れ日蓮の論法、中古時代の歐羅巴人の論法、即ち所謂「依法不依人」的論法にして科學以前の人には惟一の論法なりしなり、「是れ我が言にあらずして釋迦牟尼世尊金口の佛說なり」と、古代誠實の士は如斯論法を以て滿足せしなり、日蓮は自然的災異は日本人が彼の尊崇する法華經を奉戴せざるが故なりと論定せり、而して猶ほ「自界叛逆難」と「他國侵逼難」とは彼等の不信の結果として彼等の頭上に落ち來らんとすと預言せり、余輩は彼の中古的教育が經典以外に自然的現象を解することを彼に許さざりしを惜む、然れども日蓮は全く誤らざりし、學術の進步を以て誇稱する吾人は彼の非科學的なりしを笑ふと同時に彼に吾人の有せざる心靈(スピリチュアルインスチンクト)的本能の存せし事を許さざるべからず。

是れ日蓮の論法、中古時代の歐羅巴人の論法、即ち所謂「依法不依人」的論法にして科學以前の人には惟一の論法なりしなり、「是れ我が言にあらずして釋迦牟尼世尊金口の佛說なり」と、古代誠實の士は如斯論法を以て滿足せしなり、日蓮は自然的災異は日本人が彼の尊崇する法華經を奉戴せざるが故なりと論定せり、而して猶ほ「自界叛逆難」と「他國侵逼難」とは彼等の不信の結果として彼等の頭上に落ち來らんとすと預言せり、余輩は彼の中古的教育が經典以外に自然的現象を解することを彼に許さざりしを惜む、然れども日蓮は全く誤らざりし、學術の進步を以て誇稱する吾人は彼の非科學的なりしを笑ふと同時に彼に吾人の有せざる心靈(スピリチュアルインスチンクト)的本能の存せし事を許さざるべからず。

是れ日蓮の論法、中古時代の歐羅巴人の論法、即ち所謂「依法不依人」的論法にして科學以前の人には惟一の論法なりしなり、「是れ我が言にあらずして釋迦牟尼世尊金口の佛說なり」と、古代誠實の士は如斯論法を以て滿足せしなり、日蓮は自然的災異は日本人が彼の尊崇する法華經を奉戴せざるが故なりと論定せり、而して猶ほ「自界叛逆難」と「他國侵逼難」とは彼等の不信の結果として彼等の頭上に落ち來らんとすと預言せり、余輩は彼の中古的教育が經典以外に自然的現象を解することを彼に許さざりしを惜む、然れども日蓮は全く誤らざりし、學術の進步を以て誇稱する吾人は彼の非科學的なりしを笑ふと同時に彼に吾人の有せざる心靈(スピリチュアルインスチンクト)的本能の存せし事を許さざるべからず。

惡魔外道の來るは世の正に背き人の惡に歸し、善神は去り正法は蔽はるるより惡魔魔鬼の來つて爲す所なるを明し、次に法然が選擇集を破斥して正法を蔽ふものなることを辨じ、曾に淨土を冀ひて三部經の他の餘經をば捨閉閣抛の四字に付するの甚しく非なるを喝叱し、次に正法を謗るの大罪過なるを說き、次に法華經の眞實敎大乘敎最勝敎たるを說き、結末に法華を尊信し念佛を抛下せずんば災異は今よりも猶ほ多く來らんことを

立正安國論の要たる先づ金剛明經大集經仁王經藥師經の四經に據て、災異の來るは世の正に背き人の惡に歸し、善神は去り正法は蔽はるるより惡魔魔鬼の來つて爲す所なるを明し、次に法然が選擇集を破斥して正法を蔽ふものなることを辨じ、曾に淨土を冀ひて三部經の他の餘經をば捨閉閣抛の四字に付するの甚しく非なるを喝叱し、次に正法を謗るの大罪過なるを說き、次に法華經の眞實敎大乘敎最勝敎たるを說き、結末に法華を尊信し念佛を抛下せずんば災異は今よりも猶ほ多く來らんことを

立正安國論の要たる先づ金剛明經大集經仁王經藥師經の四經に據て、災異の來るは世の正に背き人の惡に歸し、善神は去り正法は蔽はるるより惡魔魔鬼の來つて爲す所なるを明し、次に法然が選擇集を破斥して正法を蔽ふものなることを辨じ、曾に淨土を冀ひて三部經の他の餘經をば捨閉閣抛の四字に付するの甚しく非なるを喝叱し、次に正法を謗るの大罪過なるを說き、次に法華經の眞實敎大乘敎最勝敎たるを說き、結末に法華を尊信し念佛を抛下せずんば災異は今よりも猶ほ多く來らんことを

立正安國論の要たる先づ金剛明經大集經仁王經藥師經の四經に據て、災異の來るは世の正に背き人の惡に歸し、善神は去り正法は蔽はるるより惡魔魔鬼の來つて爲す所なるを明し、次に法然が選擇集を破斥して正法を蔽ふものなることを辨じ、曾に淨土を冀ひて三部經の他の餘經をば捨閉閣抛の四字に付するの甚しく非なるを喝叱し、次に正法を謗るの大罪過なるを說き、次に法華經の眞實敎大乘敎最勝敎たるを說き、結末に法華を尊信し念佛を抛下せずんば災異は今よりも猶ほ多く來らんことを

立正安國論の要たる先づ金剛明經大集經仁王經藥師經の四經に據て、災異の來るは世の正に背き人の惡に歸し、善神は去り正法は蔽はるるより惡魔魔鬼の來つて爲す所なるを明し、次に法然が選擇集を破斥して正法を蔽ふものなることを辨じ、曾に淨土を冀ひて三部經の他の餘經をば捨閉閣抛の四字に付するの甚しく非なるを喝叱し、次に正法を謗るの大罪過なるを說き、次に法華經の眞實敎大乘敎最勝敎たるを說き、結末に法華を尊信し念佛を抛下せずんば災異は今よりも猶ほ多く來らんことを

立正安國論の要たる先づ金剛明經大集經仁王經藥師經の四經に據て、災異の來るは世の正に背き人の惡に歸し、善神は去り正法は蔽はるるより惡魔魔鬼の來つて爲す所なるを明し、次に法然が選擇集を破斥して正法を蔽ふものなることを辨じ、曾に淨土を冀ひて三部經の他の餘經をば捨閉閣抛の四字に付するの甚しく非なるを喝叱し、次に正法を謗るの大罪過なるを說き、次に法華經の眞實敎大乘敎最勝敎たるを說き、結末に法華を尊信し念佛を抛下せずんば災異は今よりも猶ほ多く來らんことを

立正安國論の要たる先づ金剛明經大集經仁王經藥師經の四經に據て、災異の來るは世の正に背き人の惡に歸し、善神は去り正法は蔽はるるより惡魔魔鬼の來つて爲す所なるを明し、次に法然が選擇集を破斥して正法を蔽ふものなることを辨じ、曾に淨土を冀ひて三部經の他の餘經をば捨閉閣抛の四字に付するの甚しく非なるを喝叱し、次に正法を謗るの大罪過なるを說き、次に法華經の眞實敎大乘敎最勝敎たるを說き、結末に法華を尊信し念佛を抛下せずんば災異は今よりも猶ほ多く來らんことを

立正安國論の要たる先づ金剛明經大集經仁王經藥師經の四經に據て、災異の來るは世の正に背き人の惡に歸し、善神は去り正法は蔽はるるより惡魔魔鬼の來つて爲す所なるを明し、次に法然が選擇集を破斥して正法を蔽ふものなることを辨じ、曾に淨土を冀ひて三部經の他の餘經をば捨閉閣抛の四字に付するの甚しく非なるを喝叱し、次に正法を謗るの大罪過なるを說き、次に法華經の眞實敎大乘敎最勝敎たるを說き、結末に法華を尊信し念佛を抛下せずんば災異は今よりも猶ほ多く來らんことを

立正安國論の要たる先づ金剛明經大集經仁王經藥師經の四經に據て、災異の來るは世の正に背き人の惡に歸し、善神は去り正法は蔽はるるより惡魔魔鬼の來つて爲す所なるを明し、次に法然が選擇集を破斥して正法を蔽ふものなることを辨じ、曾に淨土を冀ひて三部經の他の餘經をば捨閉閣抛の四字に付するの甚しく非なるを喝叱し、次に正法を謗るの大罪過なるを說き、次に法華經の眞實敎大乘敎最勝敎たるを說き、結末に法華を尊信し念佛を抛下せずんば災異は今よりも猶ほ多く來らんことを

立正安國論の要たる先づ金剛明經大集經仁王經藥師經の四經に據て、災異の來るは世の正に背き人の惡に歸し、善神は去り正法は蔽はるるより惡魔魔鬼の來つて爲す所なるを明し、次に法然が選擇集を破斥して正法を蔽ふものなることを辨じ、曾に淨土を冀ひて三部經の他の餘經をば捨閉閣抛の四字に付するの甚しく非なるを喝叱し、次に正法を謗るの大罪過なるを說き、次に法華經の眞實敎大乘敎最勝敎たるを說き、結末に法華を尊信し念佛を抛下せずんば災異は今よりも猶ほ多く來らんことを

率先せられん事を恐れて先を爭ふて山野の林裝を剝奪するより來るものなり、洪水と罪惡との關係は實に最も近きものなり、疫癘と道德との關係に至ては更に明瞭緻密なるもの、勿論之に羅るものは皆な悉く其犯せし罪の刑罰に依ると言ふを得ず、然れども社會として國家として人類として之に惱さるゝは現然たる道德的源因よりする事は理の最も睹易きものなり、幾多の火災は不平怨恨嫉妬より起りしよ、幾多の饑饉は非政の結果なるよ、人は災害を以て排除し得べきものなり。

日本の颶風は其地理學上の位地に因るものなり、其震災は其地質的構造の然らしむる所なり、吾人は改悔懺悔するも是等災害より免るべきに非らずさせん。

地震颶風は道德的に避くるを得ず、然れども道德的に其災害を減少し得るなり、恐怖は苦痛の極なり、恐怖は不幸を張大ならしむるもの、恐怖去るに及んで人生の苦痛の過半以上は去りしなり、而して恐怖は罪惡の直接の結果なり、恐怖の民は災害を最も多く感ずるものなり、故に仁政行はれ民各其天職に安んずる時は熒星顯るゝと雖も之に意を留むるものなく、震災の犯す所となるも損傷を感ずる尠し、古昔より噴火震災が罪惡に沈める社界を警醒せし實例甚だ多し、有名なるソドム、ゴモラの兩市が陷落して今日の「死海」と成りし事、ベスビアス山の噴裂に依てポンペイ、ヘルクユレーニユムの塡塞せし事、千七百五十五年のリスボン府の大地震、近くは歐洲賭博の中心なるリビエラ沿岸の破壞、是等は地動的災害が罪惡に伴ひ來りし著名なる實例なり、余輩は天が殊別に積惡の民に災害を下し給ふや否やを知らず、然れども天災は刑罰として客觀的に主觀的に災害は日本人民を惱ませり、日蓮は詩人にして科學者以て最著名なる者となせり、瑞典國の神秘的哲人スウヰデンボルグの未に非らず（宗教家は概れ然り）、彼の道德は佛教なり、彼の佛教は法華經なり、故に自然的災害を以て法華經流布の障害より來りしものとなせり、是れ彼の前提（プレミス）より來る自然の結論なり、誤謬は彼の前提にありて彼の論法にあらざりしなり、災害は道德的原因の結果として見るを得べし、或る意味より言へば吾人改悔の爲め天の送りし警戒と見て可なり、然れども是を以て法華經流布の妨害より來りしものとなせしは日蓮の偏見なり、恰も基督教徒が國難の起るを以て其宗教の傳播せざるが故なりとし、新教徒（プロテスタント）が伊國の震災を以て天主教徒の跋扈に歸するが如し、立正安國論は日蓮の深き隘きを同時に示すもの、「國は法に依て榮へ法は人に依て立つ」、是れ何人も抗言する事能はざる所、「正法に背けばその國に七難起る」、是れイザヤもエレミヤもルーテルもカントもソクラテスも承認する所、然れども正法（眞理）を以て彼の法華經と同意義ならしめし事は彼の狹隘と無學と固執とを示せり。

日蓮の元寇豫言は屢非難を受けしもの、其當否は純粹歷史の問題にして余輩の爰に論ぜんと欲する所に非らず、然れども日蓮の性を以て異國の侵迫を前視せりとは余輩の信ずるに躊躇せざる所なり、そは感能過敏彼の如きものが將來を未發に前知せし事は其例決して尠なからざればなり、豫知は詩人特有の感能なり、詩人ゲーテに其著しく發達せし事は彼の記錄に存して明なり、加奈太オンタリオの人醫學博士アール、エム、バツク氏曾て Cosmic conscious mem（宇宙的感能）てふ論題に付て彼の研究の結果を某學會に報じたる中に、彼は人心が發達して終に宇宙の事物を未發に知覺し得るに至るを述べたり、而して其實例を擧げ、使徒保羅、シエークスピア、佛の小說家バルザック（H. Honore de Balzac）、獨の神秘學者ベーメー（Jacob Boeme）、英の畫工詩人ウヰリヤム、ブレーク等を以て最著名なる者となせり、瑞典國の神秘的哲人スウヰデンボルグの未

來豫言が能く適中して彼の學敵哲學者カントを驚かせし事は能く知れ渡りたる事實なり、然れども僧日蓮の豫言と最も相似寄りたるものは伊國フローレンスの宗教改革者サボナローラの豫言なり、彼は彼の國人の罪惡を責めて其現罰さして他國の入寇あらん事を豫言せり、而して彼の宣言果して違はず、千四百九十四年佛王カール第八世の攻入を見たり、是れ何人も疑ふ可からざる歴史上の事實なり、日蓮サボナローラ兩雄の相似たるは此一事に止まらず、激熱なる彼等の特性、兇語に富める彼等の辨舌、燃ゆるが如き彼等の誠實、抗す可からざる彼等の勇氣……日蓮を東洋のルーテルと稱するは不可なり、日蓮は東洋のサボナローラと稱すべし。

日蓮の元寇豫言は比類なき心理的現象に非らず、然れども彼が是を以て法華經尊奉を國民に強ひしは彼の偏見妄想と言はざるを得ず、余輩の已に論述せしが如く彼は已に彼の前提に於て誤まれり、超自然的の彼の天才は彼の智識的欠乏の爲に屢曲用せられたり。

國民的詩人

平田生

十二

吾人は國民的詩人ロバート、バーンスの詩に付きて既に多くを云へり。若し夫れ彼の爲人に至つては更に多く觀察すべく研究すべく、觀察し研究して後世の詩人たるものゝ訓誡となすべきもの更に多からん。彼が如何に幸福なりし乎、如何に不幸なりし乎、エールシアーの空氣は如何に彼を育てたる乎、アルビン、エデンボローの空氣は如何に彼を害ひたる乎、彼の中には如何なる二個の性情ありし乎、彼の高尚なる自己と卑賤なる自己は如何に彼の心中に相戰ひし乎、彼は如何に、壓抑と戰ひて

メソロンヒの陣營に沒したるバイロン卿の如く、眞の性情の蕾將に綻びんとする時、窮乏と戰ひてエリスランドの小屋に沒したる乎、此等のことに付きては更に多くの語るべきものあらんされど吾人は既に彼の詩に付きて多くを云へり。乞ふ吾人をして彼の光明なる側に付きて多くを云ふに止まらしめよ。彼の暗黑なる部分は既に朽つべき彼の肉躰と共に葬られて墓中にあり、彼の光明なる部分は今に殘る。

彼の詩固より之を成就するの方便にして最も貧しかりし也。彼は蒸瀛機關の後に立つて綿絲を紡績するを得ざりし近代の侏儒ならずして、赤手以て大山を動かされはならぬ古代の巨人なりし也。

シエークスピア、ミルトンの如く滔々さして思想界の中央を流るゝ大河にあらずと雖、而も其の最も深き底より迸り出でたる噴泉にあらず。常に新らしく常に變らず、朝には日出を迎へて、玉の如く散り、日中には高く天を衝きて銀河の倒に落ちたるが如く、夕には日沒に照りて虹の如く輝き、明日の晴天を約す。

バーンスの詩に付きて既に多くを云へり。

近時、往々にしてロバート、バーンスの名が邦人の口頭に上るを聞き、邦字の活板に上るを見ることあり。此の篇、彼の一端を紹介するを得ば幸也、

アナユー讀者！

批評

日清之將來

日清聯合して英露に當り、朝鮮は日清兩

田川大吉郎氏著
八尾書店發行

國保護の下に置くべしといふを論旨とせるものなり。

曰ふ、

日清二國にして相抱持して渝らざる間に、英露諸國の來り襲ふ所とならば、日清二國の交情は此よりして一層の親を加へ、以て相容與起敬して違はざるを得べし。

然るに未此に至らずして、日清二國の兵互に相衝突し、日清二國の政府互に相偏執し、日清の民互に相競爭し、或は其財用の多寡を爭ひ、或は其執法の公平ならざるを疑ひ、或は其交通の通塞を論じ、其交情を冷却することもあらば是大事なり。もと日清對峙して未だ血を見るに至らざりし前の著なりとはいへ、明に是れ非開戰議を主張したるものにして、餘り大觀達識の言にはあらざる如し。（正價二十錢）

紅葉山人著
春陽堂發行

紫

全躰の結構は兎に角、極めて氣の弱き書生を寫して躍々乎、妙と謂ふべし。

「味木樣が入らつしやいまして」。と案内して立つと、入違ひに味木は徐々と入つて來て、びつたりと端近に坐る。

「今晩は。御機嫌よろしう。大變御無沙汰をいたしまして」。と袂からピンヘッドを取出すと、一所に摑出した紙屑を落して、慌てゝ拾ひこむ。

「火鉢の傍へお寄なさい」。

夫人はお香と共に左右に開いて、手爐の前に席を推へる。先生は靜馬を進ましてゝ、

「久しく見えなかつたが、不相變勉强か」。

「はい、勉强だけは十分にいたしたつもりでございますが」。

と下を向いて煙草を燻ける。（下畧）

（定價三十錢）

百家風月集

百家風月集は或る百人の和歌を取て之を錄し且つ其像を圖したるものなり。中に其人の傳ふべきにあらずして而も收錄せられたるもの少なからず。怪み來て其凡例を見れば、曰く

本書は古百人一首の例に倣ひ百名を以て一編となすと雖も該書の如き精練の和歌のみを記載するに非ず苟も其人熱心にして揭載を望むものは之を拒まずして揭載せり依て玉石混交するは固よりなり是れ各自其感發の情志を顯はすの微意にして其巧拙を論ずるに遑あらず故に其題名に於ける大家又は名家を以てせず單に百家風月集と名付くる所以なり

果して然る乎吾人亦何をか言はん。（定價五十錢）

増山守正氏編集
増山持正氏發行

明治文苑

明治文苑は明治の漢文詩若干を輯錄したるもの。其經世の文字にあらざるは言ふまでもなけれど、亦彫琢の妙あるものなきにあらず。（定價十七錢）

日下寛植松彰二氏選錄
普及舍發行

西鄉隆盛傳第一卷

《勝田孫彌氏著西鄉隆盛傳發行所發行》

紅々白々處主人

西鄉隆盛傳の著者は薩南の人にして、實に其景慕する所を傳したるもの。明治廿三年二月事實の探究に着手し、二十五年十一月筆を執りて二十六年十月稿を終へたりを云ふ。其力を用ふること蓋し少なきにあらさるべし。且つ其資料を得ることにつきては極めて多くの便益を得たるもの如く、其能く大冊をなすに至りたるも宜なるに似たり。

全部五卷八編、以て其五十一年の生涯を叙し、已に發行したるもの一卷二編、其年三十二にして彼が投海の事に至るまでの經歴を叙したり。極めて叙述の詳細を勉めたるの極、往々本傳に關係せざるの事實をも收叙し、文旨繁絮にして稍理義の明徹と筆鋒の犀利とを缺く如き感なきにあらざれば以て全國を統一するに足らず、又賢主長を置くにあらざれば以て之を駕御するに足らざるが故なり。齊彬侯の如き、實に此の内國統一論者の重なるものにして、西鄉が第一の公生涯は命を奉ㇾて此の内國統一論の實行を期する運動なりき。

而して此派の論者を代表したるものは、其初水戸の兩田にして烈公を首領させしが、兩田沒するに及びて齊彬侯最も力を盡し、大に京江及び諸侯間に周旋したり。西鄉は固より此等の論策を發意したる者にあらず、又其識見議論も一籌を橋本左内等に輸する如き狀況なきにあらざりしと雖も、能く大局の事情に通ㇾ、其斷々乎たる實行を以て此時已に斡旋の中心たらんとしたりしなり。

既にして形勢一變井伊直弼大老となりて、内國合議的統一論派の主唱したる賢主長擁立策漸く敗るゝに及び、一派の志士は密勅を得て列藩を連ね、以て之に當らんとせしに、彼は之を輕擧なりとして内勅降下を止めんと欲したり。然るに一旦京師に入りて實力あるにあらざれば到底幕府に抗する能はざるを見るや、彼は直ちに其内勅を利用して諸大藩を聯合せんとし、非常なる勇斷を以て之れを實行するを猶豫せざりしなり。是れ其異日に於ける一言を山の如く重からしめし彼が面影の、豫め見得當時の最も聰慧なる輿論として内國統一論起れり。内國統一論の結果として一方に賢諸侯收攬策となり、一方に首領撰擇說を出せり。是れ全國を統一するにあらざれば以て外侮を防ぐに足らず、賢諸侯を收攬するにあらざれば以て全國を統一するに足らず、又賢主長を置くにあらざれば以て之を駕御するに足らざるが故なりき。齊彬侯の如き、實に此の内國統一論者の重なるものにして、西鄉が第一の公生涯は命を奉ㇾて此の内國統一論の實行を期する運動なりき。

而して此派の論者を代表したるものは、其初水戸の兩田にして烈公を首領させしが、兩田沒するに及びて齊彬侯最も力を盡し、大に京江及び諸侯間に周旋したり。西鄉は固より此等の論策を發意したる者にあらず、又其識見議論も一籌を橋本左内等に輸する如き狀況なきにあらざりしと雖も、能く大局の事情に通ㇾ、其斷々乎たる實行を以て此時已に斡旋の中心たらんとしたりしなり。

既にして形勢一變井伊直弼大老となりて、内國合議的統一論派の主唱したる賢主長擁立策漸く敗るゝに及び、一派の志士は密勅を得て列藩を連ね、以て之に當らんとせしに、彼は之を輕擧なりとして内勅降下を止めんと欲したり。然るに一旦京師に入りて實力あるにあらざれば到底幕府に抗する能はざるを見るや、彼は直ちに其内勅を利用して諸大藩を聯合せんとし、非常なる勇斷を以て之れを實行するを猶豫せざりしなり。是れ其異日に於ける一言を山の如く重からしめし彼が面影の、豫め見得べかりしものなりき。

元來德川氏二百餘年の政策は專ら内亂に備ふるものにして、常に一部の大諸侯を敵國視し、陰に之に當るべきの形勢を形つくりつゝありたるに、一旦外交事艱にして、復た舊來の政策を保持すべからざるや、此日の大計は舊來の内閣政策を捨て、新に防侮政策を取らざるべからざるより、

過を見てここに其仁を知る。彼の彼たりし所以のもの、豈亦此等の所處にあらざるなからんや。好漢愛すべし。今已に亡いかな。

近刊雜書

日清戰爭實記 第一編	東京市日本橋區本町三丁目	博文館	發行
新撰朝鮮會話	洪奭鉉氏著	右同所	發行
京城之凱旋 第一編	全市京橋區南傳馬町二丁目	嵩山堂	發行
俳諧の友 第一號	大阪市大寶寺町仲ノ町八十六番邸	圖書出版合名會社	發行
水滸後傳 第十五第十六第十七	東京市京橋區鎗屋町十五番地	庚寅新誌社	發行
草茅危言	全市牛込區北山伏町 小山愛治氏著	中央學會	發行
貞德寶鑑	全市京橋區南八丁堀二丁目 前田長太氏著	拙誠堂	發行
闘戰軍歌	全市京橋區大鋸町三番地 白井規矩郎氏著	青野友三郎氏	發行

日清開戰以來、實記を續出するもの、博文館の日清戰爭實記あり、春陽堂の日清交戰錄あり、何れも新聞紙の拔萃たるに過ぎざれども、他日の好史料たるを失はず、其再版三版を重ぬるは當然なりと謂ふべし、○新撰朝鮮會話の著者洪奭鉉氏は、現に我邦に留學せる朝鮮の青年なり、此書、兩國の語を對照して、兩國人に便益を與ふるを勘からず、○京城之凱旋も亦、日清戰爭實記の類なり、卷首に朝鮮地圖を挿入せり、○東京に於ては發句俳諧の流行稍〻衰へたれども、大阪に於ては漸く盛んなり、俳諧の友第一號を見るに材料富贍なり、○水滸後傳は、三回分を一度に發行せり、一讀して朝鮮の近事に髣髴たるを覺ゆる處あり、○草茅危言は、著者が暑中休暇中の高談壯語を集めたるもの、政治談あり、經濟談あり、法律談あり、其口角飛沫の狀を想見すべし、○貞德寶鑑は、貞德の貴ぶべきを說き盡して、遺憾なきに庶幾し、○闘戰軍歌は、新撰樂譜を添へたるだけありて、詰屈聱牙嗣に上らざるが如き處は少なし。

當今之問題

◉街火を以て祝するは何の日ぞ　豫て期したる事ながら平壤占領の報に接しては踴躍自ら禁ずる能はざるは國民の心情也見よ兒童走卒に至るまで欣々然として相見て喜色あり國民は全く軍隊と一致せり軍隊は全く國民の暖き胸中に養はる願くは北進軍隊よ此の熱切なる國民の心情を忘るゝ勿れ『北京へ』『北京へ』と叫ぶ國民をして一日も速に滿足せしめよ國民が通邑大都擧國街火を燒きて大日本萬歲を祝するの日は北京陷落の日にある也。（國民）

◉北京の天長節　世間或は「奉天府にて天長節を迎へん」と云ふを以て軍人の壯語なるものゝ〻如く未だ壯ならざるを惜む奉天府と云はずして順天府と云へ軍氣の振不振は一言の細辭能く之を證明す歐人をして休戰電報を傳へしむるが如きは帝國の名譽にあらざるなり。（報知）

◉平壤の大捷を慶して姑息の講和を警む　豐島に勝ち成歡に勝ち今又平壤に大戰して殆ど淸兵を鏖殺す何ぞ其れ我軍の盛なるや然れども連戰連勝軍氣大に振ふと共に一時休戰の暗流其の後を襲ふなしと言ふ可らず若し姑息の徒ありて平壤今回の戰勝に慰安し滿足し休戰若くは講和を議するものあらん乎唯だ當初の目的中廢して朝鮮の獨立を完成する能はさるのみならず恐るべきの禍機或は此間に伏在せん云々。（每日）

◉英人の東洋觀　頃來英國の諸新聞類に日本擧兵の理なきを言ふ是れ東洋の事情を熟識せざるに坐すと雖も亦理非の見に出るに非ずして利害の點より來るもの實に其病源たり蓋し英國の未だ地歩を東洋に

占めざるや則ち清國を敵として進取を謀れり既にして二たび清國を屈して土壤を割き屬地を開くや其商業的關繋漸を逐ふて密且つ大となり今は則ち汲々既得の利益を維持せんとを是れ勉む近時英清の輯交親厚なるは誠に是れが爲めのみ。

◉國民の耐久力

國民の耐久力とは財力と氣力とより成立するものにして此の力の彈きざる間は一時の小挫折必ずしも憂ふるに足らず而して此の力の彈きざらんとを圖るには『國の實在』を忘れざる限に於て利己心の發動を奮起せしむるの外なし所謂『勤儉の道』は是れ此の有限的利己心の發動に基くを普通とす吾輩は朝野に向ひて此の道を取れと勸告す。（日本）

◉恤兵の擧は益々急なり

軍隊勞苦の事は今日までにて已に到れり盡せりと信じ平壤以北進擊の我軍隊に向て慰勞をなすの已に無用に屬するが如くに考へ若し假令然らざるも國民の義務已に畢れる如く思惟するものあらんには是れ大なる誤解なりと云はざる可らず我軍の北進するに從ひ愈々益々恤兵の必要を感ずるをなれば今日以後は今日以前に比して益々奮て恤兵の擧を盛にせんとを希望す。（新朝野）

◉誰か戰爭は不景氣の原因と云ふ

最近三ヶ月間に於る日清貿易は宣戰後の却て宣戰前に超過するものあるに依て之を察すれば此の不景氣たる一に我實業家か一時の不振に恐惶して之を挽回するの策を講せざるの致す所たるなきを保たざるなり云々。（國會）

◉半途にして講和の機會を得せしむ可らず

支那人を對手として戰を開きながら半途にして局を結ぶときは充分に彼を懲らすに足らずして詰り我國の不利不名譽にこそあれば既に平壤の支那兵を一掃したる上は彼か平和說を提出するの暇なき其中に疾風迅雷の勢を以て直に北進し懸軍長驅鴨綠江を渡りて其本據を衝き一も二もなく彼を降服せしめて最後の結局を告げんを我輩の偏に切望する所なり。（時事）

海外思潮

◉以太利の前途

カヴールは以太利をして外國の羈絆を脫せしめ外部に對して以太利の統一を形造れり。南部と中部と北部の利害を調和し、內部に於て眞に以太利の統一を形造るは尙は第二のカヴールに待つ所あり。カヴール逝き、ラタッヂ繼ぎ、ダゼグロ侯、リカソリ男、また來り、また去りてより、以太利の滿足と繁榮と勢力は漸々減退し來り、今や四十年以前の愛國者の希望、計畫を成就するの危機に處するの責はクリスピーの肩上に落ち來れり。クリスピーは第二のカヴールたる可き乎。將た……たる可き乎。是れエッチ、アール、ヘーサイス氏かフオルトナイトリー、ジヴコーに於て解釋と言はんより、寧ろ發問したる疑題也。

◉以太利の危機

以太利人は壓制され、不滿を懷き、破產に瀕してあり。以太利の統一は機械的にして有機的にあらず。以太利の人民は名に於て一なれども、習慣と嗜好と性情に就ては一ならず。彼等が一致する點は只二つあり。現時の狀態の總て惡なると、及び政府の非難す可きと、是れ也。クリスピーが此危機に處する唯一の政治家たるは明かなれども、彼自身、及び彼れの主人、若しくは從僕たる國王も今試驗最中也。クリスピー若し全國を鎭靜し、農商を發達し、破產を救ふに成就せば、カヴール、ガリバルヂーが以太利の建設者として仰がれたる如く、彼れは以太利の救濟者として仰がる可し。彼れ若し失敗せば以太利は再び幾多の共和國と公國に分裂し、外國の政府によりて操縱せらる可く、羅馬法王もまた其俗權を恢復し來る可し。

◉王の前途

或るものは曰く、ウムベルト王は何事をもなす能はず、また何事をもなすを欲せず、彼れは只クリスピーの手に於ける弁髦たるに過ぎずと。或るものは曰く、王は尙ほ隱れたる勢力を有し、事態の切迫せる場合に於て之れを用ゆ可しと。王の人望あるはクリスピーの重稅に反對す可しと信ぜらるればクリスピーを助くればなり也。而してクリスピーの不人望なるは重稅を課すればなり也。重稅を課するは軍備の爲めに必要なればなり也。軍備を保つは列國の間に以太利の地位を保つに必要なればなり也。ヴイクトル、イムマヌエルが人民を諭して軍隊を

造りたるが如く、ウムベルト王の前途は人民を諒して軍隊を保つやう納得せしむるや、否やに屬す。

◉クリスピーの政策は劃一也。彼れの政策は立憲的クリスピーの前途　クリスピーの政策は劃一也。彼れの政策は立憲的王政の下に以太利の統一を維持せんとするにあり。彼れは北部に依頼して、南部を鎭め、法王を處置せざる可からず。ガリバルヂー、カヴールは外國に對する敵愾心に訴へて民心を繫ぎたれども、クリスピーの場合に於ては其目的を人民に理解せしめ、是れが爲めに人民を熱せしむるを頗る困難なるものあり。クリスピーの前途は彼れが人民をして立憲的統一は重稅を拂つて購ふの價値あるを理解せしめ得るや否やに屬す。人民の前途　是れ政府の不人望なる時は法王に人望の歸する時也。殊にレオ第十三世は神學上に於て甚だしく時世に後れたれども、政治上に於ては當代の人にして、能く此機に乘ずるを知れり。ガリバルヂーの革命は已れの權力を殺ぐものなるが故に、法王は之に反對したれども、已れの權を殺ぎし王の政府に反對するシ、リーの革命は暗に之れを助けたり。法王若し今の場合に於て巧に人民に訴ふれば、大いに民心を動かすを得可きが故に、法王は以太利統一の爲めに危險なる一要素と言ふ可し。以太利統一の破るゝ時は法王の俗權を恢復する時也。

◉耶蘇の新傳　露西亞人ノトヴイッチは西藏に於て耶蘇の新傳を發見したりと稱す。西藏の寺院に於て發見されたりといふ其日記によれば、耶蘇（原本にはイッサルといふ）は幼少より穎智聰明にして、永遠なる靈の宿りたる人なりとの評判高く、富豪、貴族より婚姻を申し込むもの最と多かりけるが、十三歲の時、父母の家を去り、佛陀の教を學びて其神智を完成せんが爲めに、商隊に加はりてシンド（印度）の方へ行けり。イッサル十四歲といふにシンドに達し、暫くアルヤ人の間に停り、其れよりパンヂユアブ、ラジプータンを橫切りてジヤグレナット、ラジグリア、ベラレス等の聖市に六年の月日を送り、プラミンの學者と交りて議論を上下し、總ての人に尊敬せられ、其れより西方に向て歸途に就き、到る所に教を宣べつゝ、十三年目といふにイスラエルに歸れり。猶太に於ける耶蘇の生活は畧ゝ現存の福音書と同じ。ヘール氏は北米評論に於て之れを評して曰く、是れ好事の人が耶蘇の傳記に於ける欲を補ひ。第五福音を造らんが爲めに想像を以て描きたる小說ならんと。

◉基督宣教師須くブラミンと聯合す可し　ベサント夫人東洋漫遊より歸り、「ルシファル」雜誌に投書して曰く、印度の基督教宣教師はブラミンを改宗さするの困難なるを言ふ。困難は左もある可し。但し殊更らにブラミンを基督教に傳へんとかする。ブラミンは基督教は何の新たらしき眞理をブラミンに傳へんとかする。ブラミンは基督教のよりも、高尙、深遠なる心靈的の眞理を有す。彼等は基督教徒を之れに改宗せしめんとはせざれども、自らまた傳來の信仰を保たんとを望む。基督教宣教師たるもの、彼等を改宗せんと勉めんより、何ぞ彼等と聯合して東西に橫行する唯物主義に當らざる。

時事

大元帥陛下の御着輦

大元帥陛下は去る十三日を以て新橋を發し玉ひ、十五

日午後五時二十五分を以て廣島に御着輦あらせらる。
道途の萬民熱誠を以て送迎す。

平壤の戰

吾人國民が待ちに待ちたる平壤の戰は來れり、而して大勝利は來れり。看よ左の公報電信を。

公報

十六日午後中和發同日七時四十分廣島着
昨日來師團は平壤を圍み激戰の後大勝利今朝未明全く平壤を略取す
敵の死傷極めて多し我軍死傷約三百名なり委細後より

野津師團長

其二

十六日午後一時五十分中和發同日午後二時釜山發同日午後八時十分廣島發

師團は糧食運搬の大困難に拘はらず各道より前進し昨日を以て齊しく、城の四面を圍み激烈の戰鬪の後大勝利を得たり今朝未明を以て全く之を畧取せり
敵の大將左寶貴以下死傷生擒兵器糧食我手に落ちしもの極めて多數なり
敵の兵數二萬と稱せしが昨日來一二群をなして我哨兵線を逃れ去りしのみにて他は概ね死傷及捕虜となれり
我軍死傷將校以下約三百名なり
此大勝利を得しは我天皇陛下の威靈と將校以下の忠勤に依らずんば此に至らず

平壤にて　野津師團長

敵の大將左寶貴は奉天府及牛莊附近に屯在せし寶軍の統領なり

其三

十六日午前九時發道發午後六時十五分廣島着
昨日平壤攻撃の際來院せる負傷者將校十一名下士以下二百六十即死少し入院後死者二名。

柴田第一野戰病院長より廣島石黑衛生長宛

又た山縣大將の報告は左の如し。

其一

佐藤大佐の枝隊は成川より立見少將の枝隊は麥田店より大島少將の混成旅團は義州街道より進み野津中將の本隊は大同江を渡り共に平壤に向ひ十五日四面より同府を圍み攻撃す敵の大部分は平壤府内と其左右に在り敵の大砲二十門以内土人の言に依れば敵の數は四萬人なり
本隊は江を渡る爲め少く後れ十五日の攻撃に於て敵の騎兵百餘名を斃したり此日の攻撃は結果十分ならず依て十六日未明より再び攻撃を初めしに大島少將の旅團は將校即死六名負傷十二名下士卒死傷三百名内外に及びたるも彈藥の缺乏さに依り止むを得ず攻撃を中止せしも他の戰鬪漸次勝利の景況を呈し午前八時頃全く平壤を畧取し敵の大將左寶貴以下死傷生擒兵器糧食我手に落ちしもの極めて多し
右山縣大將より昨(十七日)午前三時高陽郡發の電報今(十八日)午前八時七分大本營に到着せり

其二　(同四時五十八分着)

第五師團長は敗兵追撃の爲め昨十七日一枝隊を前進せしむ又捕虜の數は已に六百名に達したり佐藤枝隊は將校即死三名負傷四名下士卒死傷四十名其他は未だ報告なし
分捕品中金銀塊を滿たしたる目方三十五貫目餘の函四十函韓錢六萬七千貫ありし報あり
以上は十八日午前二時彼地發山縣大將より大本營宛の報告なり

是れ僅に日清戰爭の發端のみ、前途猶茫々たり。兵騎

◎平壤の戰死者

平壤の戰大島少將の軍最も苦戰し、最も死傷多し、其死傷將校の姓名を擧くれば左の如し。

戰死者（六名）

歩兵第十一聯隊中隊長歩兵大尉	田上覺	岡山縣士族	四十五年十一月
歩兵第十一聯隊中隊長歩兵大尉	町田實義	鹿兒島縣士族	四十二年二ヶ月
歩兵第十一聯隊中隊長歩兵大尉	林久實	鳥取縣士族	三十八年十ヶ月
歩兵第廿一聯隊中隊長歩兵大尉	山本忠知	岡山縣士族	四十四年三ヶ月
野戰砲兵第五聯隊中隊長砲兵大尉	今井建	鹿兒島縣士族	三十年五ヶ月
歩兵第十一聯隊附歩兵中尉	細井有順	石川縣士族	三十七年
歩兵第廿一聯隊附歩兵中尉	平田時丸	山口縣士族	二十七年六ヶ月
歩兵第十一聯隊附歩兵中尉	本間德次郎 ◎	新潟縣平民	三十年九ヶ月
歩兵第廿一聯隊附歩兵中尉	三井每雄	山口縣士族	二十六年六ヶ月
歩兵第廿一聯隊附歩兵中尉	井野口春清	岐阜縣士族	三十三年九ヶ月
歩兵第十一聯隊附歩兵少尉	乃萬文太郎	愛媛縣平民	二十九年二ヶ月
歩兵第十一聯隊附歩兵少尉	勝田太郎	山口縣士族	二十六年八ヶ月
歩兵第十一聯隊附歩兵少尉	菅野倘一	山口縣士族	二十三年七ヶ月
歩兵第廿一聯隊附歩兵少尉	田邊元二郎	廣島縣士族	二十三年九ヶ月
歩兵第廿一聯隊附歩兵少尉	國弘榮一	山口縣士族	二十五年九ヶ月

負傷者（十五名）

野戰砲兵第五聯隊第三大隊長砲兵少佐	永田龜	熊本縣士族	三十七年十ヶ月
歩兵第十一聯隊中隊長歩兵大尉	桑木崇臺	石川縣士族	四十五年四ヶ月
歩兵第廿一聯隊副官歩兵大尉	小倉信恭	山口縣士族	四十年十ヶ月
歩兵第廿一聯隊中隊長歩兵大尉	服部尙	愛媛縣士族	四十三年六ヶ月
歩兵第廿一聯隊中隊長歩兵大尉	若月曾一郎	廣島縣士族	四十四年三ヶ月
歩兵第十一聯隊大隊副官歩兵中尉	林景敏	廣島縣士族	廿五年十一ヶ月

平壤の戰に於て、日清兩軍の死傷總數及清兵捕虜の數は左の左し。

◎日清兩軍の死傷

九月十八日平壤野津師團長より左の報あり

平壤の攻擊に於て我死者士官八名、下士卒百五十四名、傷者將校二十六名下士卒三百七十八名、雜卒三名、生死未詳の下士卒四十名あり。敵の死者約二千餘名傷者は判然し難しと雖も少なくも死者の倍はあるべし又捕虜支那人五百十三名朝鮮人十四名、其他我手に落ちし傷者支

前途猶遼遠なるの時に於て、此の勇士を失ふ。惜しむ可し、悼む可し。

那人八十二名、朝鮮人二名、馬匹の斃るゝもの無數

我死者百六十二名にして、清は則ち二千餘名我傷者四百四五十名にして敵の傷者四千以上ならんといふ、而して捕虜の清兵五百十三名に至る。以て戰の巧拙、兵の强弱を見るべし。

大日本の大廣告

大日本國の大勝は、大日本國の大廣告なり、大日本國の大吹聽なり、平壤大勝利の日本と大勝後と日本は歐米人の眼中大に其尺度を異にせん。

大勝の影響

株式上騰、地價上騰、酒舖の發賣亦平日に倍するに至る。平壤の大勝の影響的面也。

佛國清政府に迫る

佛國は宣教師虐殺の一件を以て、短兵急に總理衙門に迫る、期日を約して、決答を迫る。清政府若し辨償を肯ぜずんば、彼れは最後の決心を爲さんとしつゝある也。腹背の敵！李翁大狼狽！

日韓の攻守同盟

日韓の攻守同盟は成れり。

大日本大朝鮮兩國盟約

大日本大朝鮮兩國政府は（日本曆明治二十七年七月二十五日朝鮮曆開國五百三年六月二十三日）に於て朝鮮國政府より清兵撤退一節を以て朝鮮國京城駐在日本特命全權公使に委託して代辨せしめたる以來兩國政府は清國に對し既に攻守相助くるの位地に立てり就ては其事實を明著にし併せて兩國事を共にするの目的を達せんがため下に記名せる兩國大臣は各々る全權委任を奉ㇾ訂約したる條款左に開列す

第一條　此盟約は清兵を朝鮮國の境外に撤退せしめ朝鮮國の獨立自主を鞏固にし日朝兩國の利益を增進するを以て目的とす

第二條　日本國は清國に對し攻守の戰爭に任し朝鮮國は日兵の進退及其糧食準備のため及ぶだけ便宜を與ふべし

第三條　此盟約は清國に對し平和條約の成るを待て廢罷すべし此れがため兩國全權大臣記名調印し以て憑信を昭にす

大日本國明治二十七年八月二十六日　特命全權公使　大鳥圭介

大朝鮮國開國五百三年七月二十六日　外務大臣　金允植

此條約たる、我軍を平壤に進むるに當りて、多少の効驗なきにあらざりし、只府使郡守未だ我軍隊を信ぜず、潛かに欵を清國に通ずるものありて、我軍の辛酸實に少なからざりき。瑞興府使洪鐘淵の、縛枷の辱を受けたる此條約を無視したれは也。

第七議會

臨時議會は遂に開かれず。通常議會は不日召集の令を

發せられんとす。首相在らず、陸海軍大臣在らず。政府も公共心を以て臨むべし、議會は無論愛國心を以て當る可し、第七議會は第一議會以來未だ曾て類なき上品の議會なるよ。

對外自主派と第七議會

對外自主派たる中央政社が、外難の日に當りて、如何に私を捨て公に就きたるかを看よ。左の決議は其證據人なり。

（一）清國をして東亞永遠の平和を保證するに足るべき盟約を結ばしむるに非ずんば決して媾和す可らざる事

（二）右の目的を達するに必要なる經費は必ず其徴課の途を立つべき事

（三）對外自主派は擧國一致して外難に當るの必要を認む故に内閣の過失は成る可く之を寛容し外難に對して充分の活動を誘掖する事

（四）内閣尚ほ帝國の光榮と利益とを保全するに足るべき働きを爲さゞる時は止むを得ず臨機の措置に出づべき事

經費は惜まずして、徴課の途を立てんと欲し、内閣の過失は成る可く之れを寛容して對外の活動を自由ならしめんと欲す。對外自主派の志實に嘉す可き也。對外自主派は議會の大多數也。若し只乘取を目的とし、私慾私利を滿足せんと欲せば、此時に乘し、多數を頼みて何事をも企つるを得べし。然るに事此に出てずして、寛大にも大氣にも斯の如き男子らしき方針を以て、國事を處するは、其心事の純潔なるを見る可きなり。政府の反對に立つものすら斯の如く國家の爲めに政府を助くるの方針を取るに當りて、支那征伐の大目的を達する能はず、或は中途にして姑息の媾和說を立つるが如きとあらば、是れ全く政府の責也。

武官と文官

武官の位置は輕氣球の如く上る。少尉は中尉となり、中佐は大佐となり、大佐は少將となる。特に戰功は彼等の位置と聲名とに一飛躍を與ゆ。加之人民の彼等を待つ益篤きを加ゆ。是に於て乎、文官の顔色甚だ擧らず。田尻大藏次官が、聖駕奉送の日に當りて、『おれも今日の樣なならば軍さ人形になりたいものだ』と戯れたるは、亦文官失意の消息を漏らしたるものと謂ふ可きなり。

仲裁を恐るゝ勿れ

仲裁を恐るゝ勿れ、仲裁を憂ふる勿れ、内國人にして此に仲裁を曰はん乎、國民は全然其人を敵とせん、外國人にして此に仲裁を曰はん乎、國民は全然其人を對手

にせざる可し。國民は總て戰爭を覺悟せり、國論は已に再起つ能はざる迄に支那を擊つことに一決せり。平壤の一戰に仲裁を呼ぶが如き餘地は少しも存せざるなり。

軍隊と國民

軍隊と國民とは其始めに於て一致せり、今に於て一致しつゝあり、其終に至る迄一致す可し。最も密に一致すべし、最も固く一致す可し。

仲裁を憂へず

國民在り焉、軍隊在り焉。仲裁を憂へず、媾和を憂へざるべからず。

平壤の戰勝と伊藤伯

伊藤伯にして智者たらば、平壤の戰に勝ちたりとて、俄かに國論如何を顧みずして、媾和說を立てざる可し。今日に媾和說を立つるは自ら求めて不人望の大渦中に陷るものなればなり、自ら求めて惡聲の陷阱中に落るものなればなり。故に平壤戰勝後の伊藤伯は猶ほ戰勝前の伊藤伯なるべしと思はる。

宜く相思ふべし

平壤戰士の勞、思ふ可し。然れども顧みて國民の發奮如何を思へよ。國民は軍人の勞を思へよ、軍人は國民の心を思へよ。

軍人の謙遜

國民の軍人を敬愛するの情愈切なり。軍人は決して驕る勿れ。最敬愛せらるゝ時には、最も謙遜なるを要す。

檢閱廢止

原稿檢閱廢せられて、新聞雜誌出獄の思あり。法律を以て攻めざるも、愛國の至情は、大なる制裁なり。爲政者法律に依賴せずして、愛國心に依賴せば、庶幾くは、善治者たるを得ん。

天何ぞ政府を寵するの甚しき

日淸戰爭の利用！政界の局面一變！千載の好機會！天何ぞ政府を幸寵するの甚しきや。

伊藤伯中途に病む

伊藤伯供奉中途、名古屋に於て病を發す。伊東翰長以下文官悉く止りて看護す、新聞紙意味ありげに報ず、然れども幾日ならずして、病癒へ伯の一行廣島に着したるは幸なりき。

國民大警戒の日

日清戰爭は、日清戰爭のみ、外交政策は其間に存せず、若し日清間に外交政策を要する時は、國民大警戒の日也。

西園寺侯爵一行の歸朝

西園寺侯爵の一行歸る。各國の使臣未だ曾て拜せざる朝鮮王妃の光顏を拜したるは一行の重なる土產なり。

軍艦と捕虜

捕獲軍艦操江は帝國軍艦に編入され、其捕虜八十餘名は、廣島より松山に移さる。編入又編入、軍艦は吾れ其捕獲の多きを欲し、俘虜又俘虜、清兵の生擒は吾はその厄介多きを見る。然れども文明の戰殘酷を貴ばず、已に生擒したる以上は、漫に其生を危ふす可らず。

海戰の大勝利

二度の陸軍二度の大勝を獲、二度の海戰亦二度の大勝を獲。其節の公報に曰く。

公報

去十六日我艦隊九艘は支那艦隊十一艘と黃海北邊海洋島附近に於て開戰し我艦隊大勝利を得て敵艦三艘を沈め一艘を燒夷せり又當港領事館に着したる報左の如し

只今大同江より入港の最上川丸の齎らせる報告に依れば去十六日午後一時我艦隊は海洋島の北東三十五マイルにて支那艦隊十二艘水雷艇六艘に遭遇し敵艦致遠は擊沈せられ超勇、揚威の二艦は遁逃して淺瀨に乘り上げハウソウ（康齊の誤か）は遂に沈沒せり獨逸の客將ハンチツケン及び丁汝昌も戰沒したりとの事は確報ならず

自から燒きたり我艦隊皆無事陛下の威稜六合に洽し萬々歲

釜山　古川大佐より

大本營宛

又た樺山海軍司令部長の電報に曰く。

去る十六日午後五時本艦隊第一遊擊艦隊赤城、西京等の十二艦は海洋島を經て太孤口沖に向ひ進行せしに十七日午前十一時四十五分敵の艦隊定遠、鎭遠、靖遠、致遠、來遠、經遠、威遠、揚威、超勇、廣甲、廣丙、平遠の十二艦及び水雷艇六艘を發見せり午後零時四十五分激戰中我軍艦西京數彈を受け舵機を破損せられしを以て「レリーヴヰング タックル」を用ひ進退自由ならざる爲め同午後三時十五分敵の艦隊及び水雷艇の中を乘り拔ける際彼れより水雷二發を發射したれども其效を奏せざりし我軍艦は假根據地に針路を進め本日午前一時四十五分歸着せり本艦列外に出つる時敵艦二艘廢艦となりしやに見受けたり其他我艦隊は尙血戰を爲しつゝあり然るに今朝最上川丸は大同江沖にて松島に出合ひ其信號を持來れり其信號に曰く

昨日海戰は我大勝利、本艦は某處に行く

又昨日投錨地に到着せし第二遊擊艦隊及び八重山は直に應援の爲め戰地に發航せり各艦隊の分れし原因は陸軍兵を護送し又之を應援する爲めなり軍艦比叡は戰鬪中火災の爲め列外に出て鎭火の後本隊の所在を失ひ今朝十時無事歸着せり同艦死亡二十八、負傷三十四人、本艦は負傷十二人、本艦に至りし彈丸數は三十拇半四箇其他二十一拇以下數箇なり

九月十八日午後四時三十分

大本營宛

樺山海軍司令部長

釜山發の電報は、更に敵情を審にす。曰く、

去る十六日午後一時、我海軍は海洋島の東北、五海里の所にて支那艦十二艘水雷六隻に遭遇し敵艦致遠は擊沈せられ超勇、揚威の二艦は遁逃して淺瀨に乘り上げハウソウ（康齊の誤か）は遂に沈沒せり獨逸の客將ハンチツケン及び丁汝昌も戰沒したりとの事は確報ならず

敗北せる敵艦は左の如し

揚威　報知艦にして一千三百五十噸　二千四百馬力
超勇　乖組百三十七人、大砲十四門
速力十六ノット、明治十四年製造

致遠　巡航艦にして二千三百噸、七千五百馬力
乗組二百二人、大砲二十門
速力十八ノット、明治十九年製造

我が海軍の光譽亦天下に煥發す。日本國の面目といふ可し。

實業教育は工業 教育なり

實業教育費國庫支辨の標準は略ぼ左に掲ぐるが如し。

一、當分の内農業商業教育を補助するよりは工業教育を補助するを主要とす

一、高等の學校を補助するよりは低度の學校を補助するを急務とす故に稍〻高等なる專門學校に對しては工業に關するものを除くの外急速補助の詮議に及ばざるべし

一、既設學校の設立者の負擔額を輕減するは寧ろ實業教育の振作を目的とする補助金の性質に反するものなれば此の弊に陷らざる樣注意するを要す但特殊の場合に至りて特別の詮議を爲すことあるべし

一、義務教育に關し相當の施設なき市町村には概して補助金を交附せさるべし

一、各學校に交附する補助金は特別の場合を除くの外多きも二千圓を過ぐるをなし而して低度の學校に對しては比較的多額の補助を與ふることあるべきも他の專門學校に對しては法律の制限より遙に少額を補助せんとす

一、新設の學校又は擴張すべき既設の學校にして生徒現數又は其の設備本年文部省令第十四號に對し缺くる所あるものと雖も修業年限二年の學校は次年度に於て同三年の學校は次年度及次々年度（以下倣之）に於て必らず之れを充實し得るの計畫確定するものは省令に適合するものと認むることあるべし

一、中學校小學校等と經濟を共通する學校は補助を受くるの限りにあらす

一、補助を受けんとする學校にして分校を有するときは本校の經濟費と分校の經濟費とを區別すべし

一、補助金は創立費及臨時費に對しては交付せす

文部の方針は、工業教育に在り。工業の發達農に及ばざる遠し。文部は其缺陷を塡充せんとする者也。

學生の意向一轉す

辯護士志願者極めて多く、曾て極少のもの、今や極多。以て學生の意向一轉せるを見る可し。

學問を易ゆると何ぞ容易なる

其方此迄英學修行爲致置候へ共獨逸學に改められべくいん。さ候はでは老身後に至りて其方の落魄を可レ見ト杞憂候。國文學これ迄爲致置候へ共止められべくいん。梧陰辭職之上は用なき事にいん草々。

九月朔

誰殿

父より

新橋より名古屋

（蘇峯生）

沿道にても靜岡、濱松、豐橋、岡崎抔の奉迎奉送は、實に目覺ましき次第にて有之候花火やら樂隊やら大旭旗やら綠門やら何一つ思ひ殘すとも無之候乍併尤も小生を感動せしめたるは刈萱女郎花亂れ咲きたる一軒家の檐端に紅色色褪めて桃色となりたる旭旗を立てたる車道の傍なる畑に筵をしき老媼老翁孫兒を携へ拜跪したる中には合掌しつゝある村婦すら見受け申候小生は彼の茅屋の小民の心根の殊勝さに落涙致し候彼等が誠心は明かに彼等の顏色にて讀まれ申候彼等は皆な欣々然たる中心快樂に禁へざる否な飛び立つ計りの心地を畫き出し候

名古屋より神戸

（蘇峯生）

別に苦情と申すには無之候得共鳳輦の通過する毎に小學教師が『敬禮』として嚴めしき號令をなし彼の無邪氣なる小供をして叩頭平身爲めに天顏に咫尺して之を拜するを得ざらしむるや或は敬極りて諛に近く是れ決して國民忠愛の心を養ふ所以にあらずと存じ候

軍紀

肅

一兵、韓人の家に入り脅迫して錢を出さしめんとして重禁錮三年に處せられ、刀を拔きて雞を奪ひ、徒刑十三年に處せらる、是れ近日の事。軍紀の肅なる斯の如し。「我は清兵を恐れず、我は恐る軍紀重きと山の如きを」斯の如くにして始めて義戰と謂つべき也。

喜べ、狂せざれ

（蘇峯生）

混堂の三助日清事件に就て發狂す。義戰喜ぶべし、勝利喜ぶべし。喜べ、喜べ、但し狂せざるを度そして。

韓人散髮

仁川の韓人散髮して日本風を學ぶ者あり。

眞宗生命保險會社

名の如きものを立てんとて奔走する者あり、申込の様數多しといふ。宗教家が實際に社會問題に入るの端緒ともなれかしとて記るす。

人を殺す八千人

兵戈の人を殺す恐るべしと雖も、疫癘の人を殺す更に恐るべきに如かず。人若し疑はゞ左表を見よ、是れ本年一月より六月に至る統計なり。

	患者	死亡
虎列刺病	一〇三人	五六人
腸窒扶斯	九、二三八	二、一六七
赤痢	七、七三〇	一、七四
實布垤里亞	二、五三五	一、四五四
發疹窒扶斯	六七	一二
痘瘡	二、七八二	三、一六六
合計	三一、四五五	八、〇二九

豐年も些少の瑕あり

秋田、鳥取、四國、東海、秋霖の爲めに害を被る。豐年にしては白璧の微瑕なり。

海外時事

◉巴里伯死す　佛蘭西ニウオリアン王家の頭領巴里伯は佛國王家追放の令出でしより奔て英國に隱栖せしが去九月十日終に病衰して死亡せり英國朝廷は爲めに十日の喪をなしぬ

◉亞細亞に於ける露國　オムスク烏拉間の鐵道は愈九月十日を以て開通し西比利亞鐵道の中央部の工事も迅速に捗り居り中央亞細亞に於ける露國稅關も去九月十三日を以て開けり

◉米國と無政府黨　米國元老院は無政府黨放逐案を通過せり（八月十七日マドリッド發）

◉東亞に於ける露佛　佛國軍艦ベーヤア號浦鹽斯德に赴き露人の歡待を受けたり浦鹽港は佛人を歡迎の爲めに町を飾り祝火をもやせり（八月廿一日巴里發）

◉伊太利王と羅馬法王　伊太利朝廷と羅馬法王廳の間に和親の徵あり（九月十一日倫敦發）

◉日清戰爭と英清　清國の役者等香港に於ける英兵を誘ふて清兵に加入せしめんと盡力しつゝあるを以て香港英兵司令官ベーカー將軍は部下に戒飾の令を發せり（九月十五日倫敦發）

經濟事情

◉軍事公債募集の好結果　大藏大臣をして六分利付ならでは如何あらんと苦慮せしめたる軍事公債三千萬圓の募集は五分利付にして左の好結果を現はすに至れり。

一金七千六百九十四萬九千圓

應募總額

內

金一千百五十八萬三千四百五十圓　額面以上の申込のもの

金六千五百三十六萬五千五百五十圓　額面申込のもの

日本は兵力に於いて支那を制するに足るのみならず、財力に於いて亦た優に支那を制するに足る。

◉東京市內の地價　漸く騰貴せんとするの傾きあり。之れか源因を數ふるものは曰く、第一日英新條約の締結。第二征清軍海陸の勝報。左れと海陸連勝、我軍遂に北京を陷いるゝに至らば、之れが爲めに一進するもの豈夫れ東京市內の地價のみならんや。凡ての商工業悉く非常の好景氣を以て迎へられん。

◉國庫金の減少と流通貨幣の增加　戰爭必らずしも民間の

資本を奪ひ去らず、戰爭は能く之れを集めて能く之れを散ず。近時の日本銀行兌換券發行の現況を見る、發行高漸次減少して而して流通高は却て增加するの現狀あり。九月十五日に終る週末の發行高及流通高に比較すれは左の如し、

	自九月十日至十五日	自九月三日至八日
發行額	一四〇、九四四、七〇七圓	一四一、二七三、五四九圓
流通高	一二七、二八七、二六二圓	一二六、三八四、〇五八圓

即ち發行高に於いては三十二萬八千八百四十二圓を減し流通高に於いては却て九十萬三千二百四圓を增加せるなり。是れ軍用品の購買急にして政府が國庫金を支出するもの多き結果たらずんはあらず。而して政府が之れが爲めに果して幾何の國庫金を支出せしかを見る、固より其詳細を知るべきにあらずと雖も、國庫現在高實に左の如き變化を呈し居れり。

一千五百餘萬圓の減
昨年の年度末に比し
九百六十餘萬圓の減

是れ空く國庫に埋沒せらるべき國庫金戰爭の爲めに民間に流布せしなり、戰爭は必らずしも民間の資本を奪ひ去らず。

◉信用取引の減少

然れども經濟界の變動は一種神經的作用より來るもの甚た多く、流通資本減少せざるも戰爭の聲は能く金融をして逼迫せしめ、一人の破產者なきも干戈の響は信用をして薄弱ならしむ。海陸連勝、我國北京城を陷いるゝに至らば、固より凡ての商工業は非常の好景氣を以て迎へられ、信用取引は大いに進歩すべしと雖も、事の此處に達する迄には多少の金融逼迫、多少の信用減少は到底免るべからず。今金融の前途を見越して各銀行及び諸商人が金錢の出し入れを警戒するに至りたりと稱せらるゝ八月中東四兩都に行はれし手形取引の全況を見るに、著しく信用取引の却退を示せるものあり、

（一）　東京手形交換所

廿七年八月

	同　七月	昨年八月
爲換手形	一五、九七〇円	一九、九九〇円
約束手形	三五〇、二七四	三七九、四五二
振出手形	一、二九一、五九六	一、五七五、七五五
送金手形	二、一一七、〇五四	二、五六四、五八二
當座小切手	一〇、三六一、九三〇	九、一七六、〇一六
合計	一四、一三六、八二六	一三、七一五、七九六

（減）　（同）　（同）　（同）　（增）　（減）

即七月に比して增加せしは唯當座小切手のみにて總計上減少せしもの四十二萬一千〇三十圓なり。更に昨年の時季と比較すれば

	本年八月	昨年八月
振出手形（減）	一、二九一、五九六円	一、四五〇、八八七円
送金手形（同）	二、一一七、〇五四	五、二二九、一二五
當坐小切手（增）	一〇、三六一、九三〇	七、七三八、一四三
合計（減）	一四、一三六、八二六	一四、四一八、一五七

當座小切手は同しく增加せしも全躰の上に於ては七十萬二千三百六十一圓を減少せり

（二）　大坂手形交換所

	本年八月	昨年八月
振出手形	一、九九〇、四三八	二八、五九六円
送金手形	二、四九二、六九六	
當座小切手	一、三一〇、九〇三	
交換小切手	五、八二二、六三四	
合計		

是れを去七月と比較すれば廿五萬七千五百〇二圓を增加せりと雖ども。大坂同盟銀行の取扱ひたる手形割引の取組高は二百十九萬五千圓にして、前月より減少せしこと二十四萬六千圓なり、其詳細は左の如し

	本年八月	
割引高	二、〇一五、〇〇〇	円
東京參着送金	一七七、〇〇〇	
橫濱參着送金	三、〇〇〇	
合計	二、一九五、〇〇〇	

金融逼迫の事に至りては大勢多少與りて力ありと謂はざる可からず。信用取引の一事に至りては斷して日清開戰の結果と謂はざるべからす。

◎社債募集の不結果　九州鐵道會社六分利付三十五萬圓の社債を募集せんとして、應募の總高漸く七萬五千圓。是れ亦た斷て日清開戰の結果より來る。

◎八月中の外國貿易　貨物輸出超過三十四萬八千九百三十七圓、金銀輸出超過七十四萬九千六百五十二圓、即ち左の如し

商品	輸出	一一、一三一、七八六 円
	輸入	一〇、七八二、八四八
	輸出超過	三四八、九三八
	輸出入全計	二一、九一四、六三四
金銀	輸出	一、五八二、三〇七
	輸入	八三二、六五五
	輸出超過	七四九、六五二

更らに之れに前七ケ月間の總計を合すれば左の如し

商品	輸出	六九、五八一、六九四
	輸入	七七、三一四、五二四
	輸入超過	七、七三二、八三〇
	全計	一四六、八九六、二一八
金銀	輸出	二四、〇九四、八四六
	輸入	二〇、二三二、二二二
	輸出超過	三、八六二、六二四

即ち既往八ケ月間の全計は一億四千六百八十九萬六千二百十八圓にして輸入の輸出に超過すること七百七十三萬二千八百三十圓、而して金銀に於いては輸出の輸入に超過すること實に三百八十六萬二千六百二十四圓なり

◎平作に勝る一割　農商務省同局は全國の米作を概算して曰く平年に比し一割以上の豐作なるべしと。然らは本年の收獲高四千萬石以上と見る、以て大差なかるべきか。

◎半年間の經濟史　「本邦の商工業は近時漸々振興の氣運に向ひ各地の鐵道會社を首とし其他諸會社の或は其事業を創設し或は其規模を擴張せるもの前後甚だ尠しとせず故に其株式及び債券の拂込に要する資金も亦小少ならずして一時緩漫に苦みたる我が金融市場も爲めに其趣を一變せんとするに至れり且內地商工業の振興は農家の富裕と相合して外品輸入の增加を促したるを以て原料に機械に將た一般の消費品に其給を海外に仰ぐを甚だ巨額に達したり而して我が輸出品の大宗たる生糸は多數の在荷を以て越年したりと雖も爾來大抵は販路を得て其輸出高大に增加

し其他製茶石炭羽二重等の輸出高も亦增加したるを以て當半季間の輸出總額は之を昨年同時期に比すれば更に增加するを得たり今ま轉ᵀて海外の景況を觀るに米國は昨年恐慌の餘波に加ふるに海關稅改正問題の爭議を以てしたれば其商業依然さして沈滯し且歐洲の市況も一般に活發なりと稱すべからざるの有樣なりしに此際に在て我が輸出貿易の增進前陳の如くなりしは先づ之を賀せざる可からずと雖も輸入の增進は更に一層大なるものありしが故に輸出入相對照するに於ては竟に輸入超過の結果たるを免れざりき是を以て當半季間は要するに內資金の需要增加するに當て外正貨の流出を見るの大勢なりしが故に都鄙概して金融の繁忙を告げ各銀行共に利子を引上て以て他日の爲めに警戒する所ありたるが如し而して商況斯の如くなりしに由り時々金融の繁忙を感ᵀたれども前述の如く生糸も大抵は賣行きたれば幸に資金固滯の患を來たすをなく又外國爲換相場は本年に入て更に低落したりと雖も其變動や激烈ならざりしを以て甚しく取引を攪擾するに至らざりしは我が貿易の爲めに慶すべき所なり」園田正金銀行上段の演說以て本年上半期我國の經濟史に充つるに足る。（以上時事九月十九日脫稿）

時事日記

九月八日　慰勞の御酒肴下賜（有栖川總長以下）。

九　清國艦隊二三隻威海衛芝罘間に出沒すとの報。

清兵九萬五千山海關に向ふの報。

間牒清國人捕縛（觀音崎近傍）。

獨國又軍艦を朝鮮近海に發せんとするの報。

十　陸奥外相大島公使に電訓す。

朝鮮金川附近の人氣俄に日本に與すとの報。

十一　日韓兩國の盟約發表。

軍旗授與式。

チャーチル卿來着。

日淸休戰の誤傳（倫敦より）。

關以西暴風雨。

十二　野津中將開城を過ぐとの報。

鴨綠江南の淸兵三萬に上らすとの報。

十三　大元帥陛下御發輦。

大元帥陛下名古屋に御宿泊。

山縣伯の一行京城に着す。

淸國第二軍を鴨綠江畔に集むとの報。

十四　大元帥陛下神戶に御宿泊。

我兵大同江を渡るの報。

風害と水害（大分、愛媛、鳥取、島根諸縣）。

十五　大元帥陛下廣島に御安着。

佛國公使我陸軍省を訪ふ。

十六　我陸軍大勝利（平壤を陷れ淸將左寶貴を生擒す）。

十七　勅語（平壤の戰勝を嘉賞あらせらる）。

皇后陛下の御祝詞（同上）。

我海軍大勝利（海洋島の近傍に敵艦三隻を擊沈め一隻を自燒せしむ）。

大阪株式動く（平壤大勝の爲めに）。

佛國公使日限を付して淸國總理衙門に迫る（宣教師虐殺に就て）。

廣島灣の通航禁示。

發行停止（『精神』）。

十八　淸人李聖美を追放す。

日本銀行（利子を改正せんとす）。

國民之友前號の紙上

『世界に於ける日本の位地』は、我邦の眞相未だ世界に識認せられざるを憤り、淸國を征伏して後、世界に識認せらるべきを痛論せり、『民心の反動を豫防せよ』は、國民の熱心を倦ましめざるやう、奮戰すべきを切論せり、『人心開放』は、規則責め學問責め等にて人心を束縛し、自然の發達を妨ぐるの非を說けり、浮田和民氏の『新日本建設の要素』は、論ぶ得て周到詳密、學海居士の勝野豐作の逸事は、奇事妙文、損辱續稿、軍事叢話の續稿、益々讀者の注意を引くに足れり、外敎生の日蓮上人論、平田生の國民的詩人、人物評論の摸範たるべく、陸戰公法、德川光圀等の批評は精嚴にして懇篤、當今之問題、海外思潮、時事、皆緊要の文字なり、